レッドハットダブルエックス

常日頃無一文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レッドハットダブルエックス

【Ｎコード】
Ｎ２１４７ＢＡ

【作者名】
常日頃無一文

【あらすじ】
「さぁさぁご主人様！　彼女こそ私が連れて来た新兵器ギルドメンバー！　リトルリビングデッドアンデッド野良々（のらら）ちゃんです！」
ビスケット村にある地下工房を備えた鍛冶屋。その玄関口が勢い良く開かれたので、ギルドマスターであるＸＸ（ダブルエックス）は飲んでいたグラスの水を置いて目やると、そこには１時間ほど前に待合酒場グウィンドリンに派遣していた、ゼンマイ式給仕型メイドであるアスカの姿があった。

金髪碧眼、エプロンドレスにカチューシャという典型的な出で立ちの彼女――不立文字飛鳥（ふりゅうもんじ・あすか）が、ジャジャンとその手を自信満々に差しむけた先には、群青色っていうなんかものすごい顔色の悪い女の子がチョコンと立っていた。さらには半眼の目をドヨンとさせつつ片手を挙げて

「アニョハセヨ」

「何連れて来てんだオメェ？」

冴えないギルドマスターのXX（ダブルエックス）とゼンマイ式給仕型メイドのアスカが織りなす、一話完結型のバトルファンタジーコメディです。さっくり読めるかと思います。

第一話：レッドハットダブルエックス

「さぁさぁご主人様！　彼女こそ私が連れて来た新兵器ギルドメンバー！　リトルリビングデッドアンデッド野良々（のらら）ちゃんです！」

ビスケット村にある地下工房を備えた鍛冶屋。その玄関口が勢い良く開かれたので、ギルドマスターであるＸＸ（ダブルエックス）は飲んでいたグラスの水を置いて目やると、そこには１時間ほど前に待合酒場に派遣していた、ゼンマイ式給仕型メイドであるアスカの姿があった。

金髪碧眼、エプロンドレスにカチューシャという典型的な出で立ちの彼女――不立文字飛鳥（ふりゅうもんじ・あすか）が、ジャジャンとその手を自信満々に差しむけた先には、群青色っていうなんかものすごい顔色の悪い女の子がチョコンと立っていた。さらには半眼の目をドヨンとさせつつ片手を挙げて

「アニョハセヨ」

「何連れて来てんだオメェ？」

ギルドマスターのＸＸは早くも怒りが噴火寸前だったが、しかしなんとか押し込め、一応は飛鳥に弁明の機会など与えてやろうと、彼は入り口扉でどんよりしている群青色少女を指さしつつ、今尚ジャジャンポーズを決めているブロンドショートヘアのメイドに問いかけてみた。

「俺、オーク討伐用のギルメン探して来いって言わなかったっけか？　なんですかこの顔色悪い子は。しかも韓国語とかしゃべってるし」

あと名前無駄に長いし、とか付け加えて見れば、飛鳥は腰に片手を当て、片手は人差し指を立ててチッチッチとかやりつつ

「いやいやいや御主人様。人は見かけで判断しちゃいけませんぜ。なにせなにせこのリトルリビングデッドアンデッド野良々ちゃんはこう見えてですねぇ」

もはやこのゼンマイ式には何も期待しちゃいないのであるが、しかし明日にはコイツも廃品回収に出してやろうとＸＸは腹積もりをし、そんなわけで一応は最後まで聞いてやる事にした。
「このリトルリビングデッドアンデッド野良々ちゃん、こんなに可愛いんですけどなんとなんと死んでるですよ～！　どうですかご主人様！　もうこれで私達のギルメンＮｏ３は彼女に確定間違いなしですよね～！」
　コイツの判断根拠侮れねー
「あ、うん。とりあえずお前の廃棄処分が今確定間違いなしだわ」
「でっすよね～！！　っふふふふふ……ほぇ？」
　その『ほぇ』ツラがあまりにも純真無垢だったため、ＸＸは怒りを通り越して泣きそうになってきた。つうか泣いていた。涙とかボロボロこぼれてきた。
「あの、ご主人様どこか痛いんですか？」
　椅子の上で体育座りし、膝頭に顔を埋めて嗚咽し始めたギルドマスターに対し、なんちゃってギルメンＮｏ２の飛鳥は心配そうに彼の頭を撫で始めた。
「うん、痛い。すごく痛い。今の状況とかお前の連れて来たアニョハセヨとかすごく痛い」
「？　ミンガラ　ネレーキンパ」
「なんかまた訳分らん事言うとるしやな、その群青色」
「ああ、あれはミャンマー語でこんにちわです。アニョハセヨが痛いってご主人様が言ったから野良々ちゃんが気遣って言い直してくれたんですよ。わぅやっさしい」
「ああ、優しいな。優し過ぎておりゃ涙とまらねーわ。っはっはっは」
　用意したスカウト料全額を『責任もってお預かり』し、そして全額叩いた末にようやく飛鳥が連れて来たのが、群青色した小柄のゾンビ娘だったっていう現実をようやく受けいれ、その代償としてＸＸは感情崩壊を起こして泣き笑いを始めたわけである。

そしてそんな様子を拡大解釈し、むしろ勘違いの域に達した野良々はその頬をやや赤くし、そっぽとか向いて
「べ、別にあんたのために言ったんちゃうし！？」
「方言でデレやがったよアイツ」
やっぱり涙が止まらなかった。

まぁそんな事になったとはいえ、手持ちのカードがそれしかなければそれで勝負するか、あるいは降りるしかないわけである。
ちなみに今回、帝国より依頼のあったオーク討伐戦における主な投資は、毎度のことながら己の命一つであり、報酬は二週間分の生活費。それを改めて検討し直して、今のカードであっても降りるほど悪い勝負ではないと、再びそんな結論に達してＸＸは一人頷いた。
今夜の相手は個体ではなく久しぶりの群体なので、少々費用がかさんでも手練のギルドメンバーを確保しておきたかったのだが、スカウトとして派遣した飛鳥が連れて来たのがまさかのゾンビ娘。特技、死なない事。世界のこんにちわ。まるで戦力として期待が出来ないのは明白だった。なので今回の作戦も、撃って出るのは恐らく自分と飛鳥の二人だけで、前衛に飛鳥・後衛にＸＸと言う、御馴染ながらも群体相手としては湿気た布陣になりそうだった。
暖炉の火に当たりつつ、愛銃のラインフィードとキャリッジリターンのメンテナンスを地下の工房で行いながら、ＸＸは昨日の内に飛鳥と打ち合わせておいた作戦を適当に反復して見る。
集団相手とは言え所詮はオークである。彼らは群れる習性がありながら群れで行動するメリットを全く理解しておらず、あれは個体個体がバラバラに切れ味の悪い戦斧を力任せに振るしか脳のない連中なので、各個撃破を心がければさして難度は高くないだろうと思われた。
「２ＶＳ１００だなんて考える必要ねーよな。２ＶＳ１を１００回やりゃぁいいんだ」
呟きながらＸＸは黒色の自動拳銃キャリッジリターンにマガジン

を装填し、ガチン、とスライドを引く。滑りは良好だった。
　自分たちの作戦地域はここビスケット村であり、火薬の産地としてそこそこ有名なこの村には、村民のみならず産業に携わる移民達も数多く暮らしているのだが、彼らは一昨日にやってきた帝国正規軍ベオウルフ（通称ボンボン軍団）の誘導に従い、既に南の教会に避難を完了させているので、ＸＸ達に後顧の憂いはない。だから今回もいつも通りに、自分さえ死なないように気をつければ良いのだ。何せ飛鳥はゼンマイ式の人形だし、新しく一時加入した奴はもうなんかいきなり死んでいるし、だから今回も、自分は慎重に立ち回って部下に派手にやらせれば良いと、ＸＸは銀色のラインフィードの銃口にクリーニングロッドをゴシゴシと突っ込みながら、そんなことをつらつら考えていた。
　キィ、と扉の軋む音がし、上から一階のランプの明りが差し込んで来たので、誰何と見上げると件の死体少女が石階段を降りて来ていた。
　彼女はそのままＸＸの向かいの椅子にチョコンと腰を降ろし、銃の置かれた作業机にカチャっと置いたのは、異国の太刀だった。
　暖炉の火に照らされたその刀は頼りなさを感じるぐらいに細く、とても実用に耐えるように思われなかったのだが、しかしそうした得物をここにもって来たという事は
「オメェ、出陣る気か？」
「借りてええかな？」
　ＸＸの問いには答えずに、その群青色の少女が掴んで彼に見せたのは、適当にうっちゃっていた目の粗いヤスリ棒だった。
　ＸＸが頷くと、彼女はメガネを取り出してチョンとかけ――おいメガネっ子か――、鞘から刀を抜いてその青白い刀身を露わにした。
　そのピクシーの羽根や森の清流を思わせるような薄い刃の美しさに、ＸＸは少しばかりメンテナンスの手を止めて見入ってしまったが、しかし彼女はその刃にゴリゴリとヤスリを当て始めたので
「え、マジ？　それ刃毀れしない？」

「……まぁね」
そうして刃の隅々まで曇る様な小傷を付けた後、彼女は作業机に置かれた銃のメンテナンス用油の内、ラージトードーの背中から得た物を選んで刃にたっぷりと漬け、それから静かに鞘へ収めた。
「こうやって油をたっぷり染み込ませておくとな、骨に当たっても引っかからんと綺麗に斬れるんやで？　へへ」
あどけない笑顔で何か生々しい事しゃべってるなぁ、とか思いつつ、ＸＸは愛銃二丁をホルスターに差し込み、トレードマークのレッドハットを頭に深く被って、出撃の準備を整え終えた。
暖炉の火を消し、小窓から差し込む月明かりを頼りに、一回に繋がる石階段をコツンコツンと昇る。ＸＸは、背中に数歩遅れてついてくる死体少女に一応声をかけてみる。
「この工房を出て真っ直ぐ南に茂みを突っ切ると、小さな橋を二つ超えたところに教会が建っている。このビスケット村の村民の避難場所はそこだ。帝国からは護衛として正規軍のベオウルフ小隊も派遣されているから、まぁ絶対とは言わんが、オークどもの戦場になるここよりはずっと安全だろう。少しぐらいこっちに回してくれりゃ俺も楽だったんだけどな。で、どうする？」
チラっと流し眼。
「今ならギリギリ間に合うぞ？　時間の関係でもう道中の援護は出来ないが、死体とはいえ腐ってもギルドライセンス持ってんなら、山犬ぐらい追い払えるだろ？」
「腐ってもギルドとか、死体に教会行けとか、なかなか皮肉効いてんな旦那は」
ＸＸからは見えなかったが、野良々は微かに笑っていた。
「戦う気ぃない兵隊なんておるだけ邪魔やろ？　帝国の正規軍のそれもベオウルフなんてエエとこのボンボンが寄り集まって出来とる名ばかり小隊やん。どうせ今回の教会護衛任務かて戦闘なんて想定してない、単なる箔付けやろしな。第一拠点防衛に弓兵だけとかありえへんやろ？へへ、そんなとこに避難やなんて、ほんま皮肉きい

てるわ、旦那は」
　ＸＸは笑いそうになった。世間知らずのワナビ戦士だろうかと思ってカマをかけてみたら、辛気臭いベテラン戦士のジョークが返ってきたからである。
「あ～、こりゃどうも。御見それしました野良々さんよ」
「野良々でええよ。さんとか痒いだけやわ。……それより、ウチはどうすればええの？　お任せ遊軍モードか？」
「いや、オメェも飛鳥と一緒に前衛宜しく頼むわ。背中と頭上は安心して俺に任せなさいよ」
「異論はあらへんけど、旦那はともかくあの姉ちゃん大丈夫なん？　人手不足は分るけど、ゼンマイ式の給仕型やろ？」
　ハハハとＸＸは軽妙に笑い、一階に繋がるドアノブに手をかける。
「まぁ、俺もそのつもりで昔に墓掘り屋のオッサンから安値で買ったんだけどさぁ、大外れだったんだわ。あいつ」
　木製の扉を開け、二人して一階に出ると、既に不立文字飛鳥はその肩に身の丈の倍はあるチェーン・ソーを背負っており、出撃の準備を完了させていた。
　二人の姿を認めると、飛鳥はニッコリと笑って
「今日もデイジーちゃんは絶好調ですぜ御主人様！」
　グルンと円を掻くようにしてチェーン・ソーを肩から降ろし、左手でスターターを引き絞ってギュインギュインとけたたましく呻らせて見せた。
　その怪力と騒音に野良々は目を瞬かせたが、ＸＸは頭に被ったレッドハットに手をやって溜息を吐いた。
「おい飛鳥。オークは頭悪くても耳は良いんだよ。初っ端から自分の隠れてる場所アピールすんのやめなさい」
「へいへいへい！　御主人様ビビってるぅ！」
「やめなさいっての」
　飛鳥は二回同じ事を言われてシブシブ――これがもうギルメンとしてあり得ない@ＸＸ談――エンジンを切ったものの、

「でもでもご主人様。別に今回は何も罠張ってませんし、帝国の人も教会にオークが流れてこないよう全力で注意を引けって言ってませんでしたか？」
「そりゃ戦が始まってからの話だよ。ミスミス先制攻撃のチャンス逃してどうすんの。今は息を殺して耳を澄ませて、アイツらの立てる足音を探るんだよ。で、斬り込む位置とタイミングを決めるわけだ。作戦は昨晩に言った通り、基本は各個撃破だ」
ＸＸがテーブルの上にトンと指を置き、それをゆっくりと渦を描くように動かして行く。
「お前達は村全体を広く使って、円を描くように後退しつつ確実にオークを一頭ずつ撃破していけ。村はそこそこ急な丘に囲まれてるから、そこは注意しろよ？　気が付いたら追い詰められてましたとか、そんなベタベタはＮＧだからな。まぁ、お前もある程度こなして馴れてきてると思うから細かい事は言わんが、基本はとにかく各個撃破だ。３ＶＳ１を敵の数だけやる。ＯＫ？」
チラっと目をあげると、飛鳥がその目をキラキラとさせていた。
「３……ってことは、野良々ちゃんも参加なんですね！？」
ＸＸは頷いた。
「その通りだ。確かオメェの相棒はこれが初めてだよなぁ。まぁ相性があるからいつも直接選ばせてるんだが、今回はようやくアタリを引いたかも知れんぞ？」
ちらりと野良々に流し眼すれば、飛鳥はその皮肉に気付かず得意げに
「でっすよね～！！　やっほいやっほい！　もが」
飛鳥の口をＸＸは手で塞いだ。
野良々は太刀を腰に差し、静かに目を閉じている。
状況を察した飛鳥に、ＸＸは目をすがめ、緊張感を含めた小さな声で言った。
「足音だ」
耳を済ませると、確かに低く曇った振動が音ではなく、微震とし

てこの工房全体に響いていた。
　ＸＸはテーブルに置かれたグラスの水に目をやり、その波紋の形状から音の方角を確認する。
「……北の森からやってきている。順調だ」
　ＸＸは二人に視線を戻した。
「繰り返すが今回は各個撃破だ。消耗戦になるから集中力と体力配分に気をつけろ。良いな？」
　飛鳥と野良々はそれぞれ頷いた。それにニヤっとした笑みを返し、レッドハットを深く被りなおすＸＸ。
「じゃぁ、お仕事しようか親不孝の皆さん」

　ギルドメンバー数総員２名という、コンビとも言い換え可能な極小ギルド『レッドハット』のギルドマスターであるＸＸから、『この金で適当な野良ハンターをダッシュでスカウトして来てくれ』というセリフと共に渡された金貨のべ２０００Ｇを、エプロンドレスのポケットにジャラジャラと流し、その日暮れ、言いつけどおりダッシュにてビスケット村の西１５ｋｍにある待合酒場グウィンドリンに辿り着いた飛鳥なのだが
「お邪魔します～。ちょっとハンターさんに用事なんですけど～……あり？」
　カランカランと乾いたベル音を立てて開いた扉の向こう、店の中。まずは一階が綺麗サッパリの空席。続いて吹き抜けで繋がっている２階も飛鳥は見上げて見たが、視界に入る限りには誰もいなかった。と言うよりそもそも、音から判断して誰もいないようだった。
　この時間帯だと待合酒場はいつも満席で、両手を酒瓶で固めている女が客の間を身体を横にして忙しなく動き回っているのが常なのだが、一体全体どうしたのだろうか。恰幅の良い店の親父も洗い終えたグラスに仕上げの磨きをかけている。
「出遅れたな使用人。目ぼしいハンターも目ぼしくないハンターも、み～んな今晩のオーク掃討戦に狩りだされちまったよ。お陰で今日

はもう店仕舞いだ」
　中をキョロキョロとしている飛鳥に、彼は手を止めずそんな風に声をかけた。飛鳥は
「え～～！？！？」
　とショックで口からネジを吐き出しそうになったが、しかし飲み込んでからとりあえず落ち着く為に自分で背中のネジを巻きなおし、そして頭を抱えて震えだす。
「あ～～どうしようどうしようどうしよう！　御主人様からは『今度こそギルメン確保にしくじったら廃品回収に提出してやるからな』とか宣告されて私は『２０００Ｇもらってスカウト出来なかったらそんなの自主的に回収されちゃいますぜ』とか言って飛び出してきたんですよ！　しかもそんなノリでこれまで４回も失敗してきたんですよ！」
「そいつは、……ひどいな」
「ですよね～！　流石にもうしくじれないっすよね～！」
　極東の諺には仏の顔も三度までとあるらしいが、しかしＸＸは仏――けどホトケってなんだろ？　美味しいのかな？　まぁいいや@ゼンマイ式――よりも寛大な心で以て、これまでの四度の失敗はギリ怒りを鎮めてくれたのである。ビービー泣いたらなんか許してくれたのである。
　でも今回は流石に、今度ばかりは流石に無理っぽい。２０００Ｇももらってから道中で既に特上とれとれリンゴとかに１５Ｇも消費している。これをシャクシャク頬張りながら手ぶらで帰宅したら、感動的に勘当されることは間違いない。ご主人様に半分あげるとかどうだろうか？　いや、むりか。
　ムムムと呻っている飛鳥に親父は苦笑し
「昼過ぎにはもう、ここにいたランクＥのハンターも、ほやほやのハンターも、ハンター（？）も皆みんな出払っちまったな。話を聞いてる限りだと、作戦地域によっては２０頭から来るらしい。帝国はどうやってそんな情報入手したが知らないが、まぁとにかく、そ

りゃ居ないよりはマシぐらいな戦力だって欲しくなるだろよ」
「ですよねぇ……はぁ」
飛鳥は気の毒なぐらい絶望的な溜息を吐いた。
「その様子だとあんたのボスもオーク討伐に行くみたいだな。ちなみにどこ担当なんだい？」
飛鳥はポケットのとれとれリンゴをいじりながら、ショボンと答える。
「ビスケット村です」
親父の手からグラスが滑り落ちた。
どうやらなにやら、飛鳥が今とんでもなくヤバイ事態であることを察してくれたらしい@飛鳥想像。
兎にも角にもこうなったら、身も蓋も無い、恥も外聞も猫も鼠も無いと、親父に案内されるままに辿り着いたのは店の裏口、つまりはゴミ捨て場で、その扉を出たすぐそこの石階段に、その群青色の少女は背を向けて中段の辺りに腰かけていた。
「お、お～い、客だぞ」
辺りを青白く照らす三日月を、少女は眺めていたようだったが、親父の呼び声に「ん？」と彼女は首だけで振り返った。
右手に握った麻の袋から、何か真っ白な粉を取り出して口一杯に頬張り、モッサモッサと口を動かしている。月明りの加減とも思ったが、どうやらそういうわけでもなく、真実彼女の顔や肌は群青色のようである。
「じゃ、じゃぁこれで店を閉めるから後はそっちでな」
扉をイソイソと締めてしまった親父に飛鳥は少しだけ振り返ったが、しかしすぐに群青色の彼女に向き直って
「あの……、何を食べているんですか？」
ゴグンと喉を大きく鳴らしてそれを飲み込んでから、少女は持っていた麻の袋をあげて揺らした。
「防腐剤や」
「防腐剤、ですか？」

「そうや。これを一日の終わりに食べとかんと、日が照って来た時に腐りだしよるからな、ウチ。まぁあんたらがゴハン食べてるようなもんや」
訛の強い言葉に、腰に差している見慣れない細い太刀、朱色と白の装束に、黒色の髪と瞳。どうやら異国の者の様である。
服はきちんと折り目がついているが、ところどころに解れと修繕のあとが見られ、髪も癖がついていて油のようなテカリがある。身体からは微かに旅の垢の匂いがする。あちこちを流浪しているようだ。
飛鳥は物珍しげにマジマジと見た。
「ふ～ん……。えっと、何で外にいるんですか？　中はすっごく空いてましたよ？　つうか誰もいないし」
彼女はハハと笑った。
「そりゃだって、ウチって死んどるから縁起悪いやん？　死体と一緒に酒飲みたがるようなヤツなんて酔いつぶれたヤツにもおらんやろ？　商売の邪魔になるだけや。店先に来た時点でソルト巻かれて追い払われても文句言えん身分なわけ。……こうやって裏口に置いてくれるだけ、ここの親父はええやっちゃ。っはっはっは」
と、彼女としては気軽に言ったつもりだったのだが、しかしそれは何かこの使用人の心に傷をつけるようなものであったらしく、やや俯いていた。
彼女は何かマズったかと思いつつ、立ち上がってワザとらしく咳払いをした。
「それよりアンタ、ウチ怖くないん？」
小首を傾げる死体少女に、今度はキョトンとする飛鳥。
飛鳥は『ウチが怖くないん』と言われても、一体全体、この群青色の少女の何を怖がるべきか分らなかった。襲ってくる気配など微塵も無いし、気さくに話も出来る用だし、外見的判断のことなら尚の事、色は悪いがただの可愛い女の子である。
もし彼女の問いが死体と言う概念を指して言っているのだとして

も、飛鳥にすればそんなもの、ＸＸに拾われる以前、それこそ本当に山ほど見てきているし、触れてきてもいるので、強いて言うなら『馴染みある』としか思えない。それこそ本当に、あの時は石を投げれば当たると言うレベルだった。

さてそんな飛鳥――自分が、今、今一番何が怖いのかと言えば、このままＸＸの元に帰って本日の成果を報告す……

「ギルドライセンスとかもってませんか！？！？」

「へ！？」

「さっきの親父からは持ってるって聞いたんですけど白状して下さいませんか？！？」

群青色少女は飛びあがりそうになった。目の前のメイドは落ち込んだかと思えばキョトンとなり、キョトンとしかたと思えば考え込み、考え込んだと思ったら自分以上に真っ青になり、真っ青になったかと思ったら今度は絶叫するものだから、彼女は思わず理由も何も尋ねずギルドカードを差し出してしまった。

飛鳥はその金属製カードを両手で持って眺めながら

「リトルリビングデッドアンデッドの野良々ちゃんですね。どうもどうも。私は不立文字飛鳥と言います。……え～っとランクは……。！？」

言葉を切ってカードと野良々の顔を三度ほど見比べて、いや四度目も見比べて、最後はその肩にガシっと手を当て、ビクっとなった野良々に構わず自身の鼻先を彼女の鼻先にグイイと押し付けるまで飛鳥は顔を寄せて

「ランクＢってマジですかぁ！？！？！？！？」

「は、はい！？！？」

声が上ずった。

「よっしゃぁ！！！　姉ちゃんギルメンにカモン！　ウチで私の御主人ファックしていいぞ！？」

「ええ！？！？」

声が裏返った。

地下工房を備えた鍛冶屋の外に三人は出て、念には念をでザっと村の様子を見渡す。
小高い丘に囲まれたビスケット村にはすっかりと夜の帳が降りていて、どの家も明りが消えているから星と月の明りが良く見えた。
ＸＸは特に夜目が効くわけではないが、それでもこの仕事をそこそこやってくれれば一般人の気配の有無ぐらい自然と分るようになるものである。避難は無事完了しているようだった。
馬屋の一つから嘶きが聞こえたので、野良々が足早に駆けよって中を覗くと、立派な黒毛の馬が繋がれたままにされていた。
「えらい勿体ない事するもんやなぁ。ほんの一手間やろうに」
彼女はヤレヤレと小太刀を抜き、馬を拘束している縄をブツリと解いてやった。
村の中央に建つ、煉瓦造りの釣鐘塔の外梯子を登りながら、その様子を見ていたＸＸは、黒馬が蹄の音を立てて向かった先が北の暗い森ではなく、教会へと続く南の茂みだった事に小さく口笛を吹き、そこから一息に昇り切った。
月明かりのお陰で見通しは悪くない。
ビュービューと吹きすさぶ風は微かながら背中の大鐘さえも揺らしており、視線の先の暗い森を不吉にざわめかせた。
風の強さと向きを全身で感じつつ、ＸＸは脳内で模擬射撃を行い、銃弾の着弾地点が風によってどのように変化するかを正確にイメージする。
南から北に向けての風が主のようだ――基本的に射程距離はやや伸びると考えて良い。東西へは比較的小さめ。左右へのブレは１ショット１ショット、臨機応変に調節しよう。彼は腕が冷えないよう、それを外套の中に隠した。
一方、オークの侵入地点と予測されている森の手前に、堂々と、と言うより間抜けな案山子という具合に突っ立っているのは不立文字飛鳥で、横に連れ子のように座っているのはスカウトして来たばか

りの野良々である。
――しっかしギルメンに見えねぇなぁ。
二つの背中を俯瞰してから、ＸＸは昼の間に何度も往復してここに運び込んだ弾薬箱のケース、おおよそ２０箱に視線を移した。
ＸＸが今回の無謀な依頼を受けた理由、もとい勝算を見出した理由は、火薬の産地として有名なビスケット村だからこそ調達できた膨大な炸薬の量にある。
自前のリロードツールを使って昨晩までせっせと愛銃の弾丸を作成していたのだが、弾薬箱が３０を超えても尽きる事はなかった。
ＸＸが依頼を受諾し、ビズケット村に訪れた時にはもう時間的猶予があまり無く、また自分の扱う炸薬がやや特殊であるという事情も相まって、若干の焦りから倉庫番に対して『ありったけ頼む』と言ってしまったのが、しかし小一時間で確保できる量がここまでとは踏んでいなかった。
この弾薬箱一つを使い切るのに、キャリッジリターンでマガジン２０個分である。そしてそれがここに２０箱。全部使い切る事は想定していないが、しかしそれでも数度は冷却しなければ愛銃はオーバーヒートを起こしてしまうだろう。
ピラミッド状に積まれたそれらに、ＸＸは笑う。
「これだけの火薬量を一か所に集めたら、火矢一本で俺はお陀仏だなぁ」
もちろん、これはオークにそんな知恵などないと踏んでの事である。
作戦はいつも通りの『レッドハット』。
ギルド名にも彼の通り名になっているこの戦術には、極めて強靭な前衛が不可欠であり、家事能力ニアリーイコール０な不立文字飛鳥が未だ廃棄回収処分されず、高い食費をおして――ゼンマイ式が飯食うと知った時はショックだった@ＸＸ談――でも彼に雇われ続けている理由がここにある。
前衛が主に要求される能力は、細かく言って敵の攻撃に耐えきる

耐久力と、それを凌ぎ切る持久力。そして、つまりはそういう状況に持ち込む為の注目力である。今のところ、飛鳥以上のレベルでこれらの要求をクリア出来てしまう化け物のような手合を、ＸＸは見た事がない。

森の闇に微かな動きがあった。

音ではなく、景色にである。

野良々は柄を握り、ＸＸは銃のセーフティを外した。

樹間に赤い瞬きがポツポツポツと現れ始め、それを裏付けるようにして地鳴りがここまで――釣鐘塔にまで響いて来た。

野良々は握った太刀を杖代わりに立ち上がり、目を細めて

「ほんならウチが露払いを――」

「止まって下さい～！！」

と、森から躍り出て来たブタ（オーク）の群れに対して、いきなり両手をブンブン振りながら無防備に走って行ったのは前衛担当の飛鳥であり、ポカンとなっているのは野良々である。

膨大な数の狂獣どもは意外な事にその足を止めてくれており、そして続けざま、

「お願いですからどうか投降とかしてくれませんか！？」

まさかの降伏勧告に野良々は埋葬されそうな勢いでコケた。

かたや飛鳥は身ぶり手ぶりを交えて実にアクション豊かに

「どうか投降してくれませんか！？　だって私、殺し合いってすごくダメだと思うんですよね！　だって死ぬんですよ！？　痛いですよ！？　ズバってなってバサってなって！　そんなのにイヤですよね！？」

すごくグダグダである。

「それでもまぁ、うん。絶対勝てるとかならアレですけど、でもそんな保証なんてどこにもないじゃないですか！？　ボコボコにされるだけボコボコにされて、敗走とか最悪じゃありませんか！？　私は絶対嫌ですよ！？」

誰もゼンマイ式の意見など聞いちゃいねーのである。

「えっと、あ、そうだ！　別に私達は貴方達と戦う意思はないんです！　ほんと！　そのまま普通に回れ右～して、元来た道を帰ってくれたら、私達は手を振って見送るだけです！　ああ、そうか。だから投降じゃなくて撤退して下さい！　お願いします！」

深々と彼女はお辞儀した。野良々は顔をヒクヒクとさせていた。もう突っ込みどころが満載過ぎて逆に突っ込めない。例えばオークがまさかの審議中とかである。

二足歩行の巨大な豚は円を作って向かい合い、斧を肩にかけて何やらブギブギやっている。おいマジか、オークにそんな意思疎通できるぐらいの知恵があるとか知らなかったわ。何このトリビアルな展開、とか何とか、なんか色々そういう感じのアレが野良々の頭の中をグルングルン旋回していて、色々となんかそんな感じになっていた――すごく適当――。

やがて群れの長っぽい一際ブタめいたブタ――飛鳥の印象――がドシドシと前に出て来て、議論の結果を示すとばかりに胸を張った。ゴクンと飛鳥は喉を鳴らす。そしてそのブタ、じゃなくてオークのボスは前足を身体の前に×の形でクロスさせて

「ブーーー！！！」

「やった帰ってくれるんですね！？」

「アホかあんたは！？」

胸の前で両手をギュっと可愛くやってる飛鳥に、野良々は思わず飛び上がって飛鳥の頭をパチンとやった。

「どう考えてもアウトやろブー言うとるやないか！」

飛鳥はブスーっと唇をεの形にして

「えー、でもオークってブーしか言わないって言うかぁ？」

「どっちみち話ならんわ！」

頭に血管浮かせてる野良々とは対照的に、飛鳥は「ん～」と腕を組んで考え込むような仕草を取り

「いっそブーしか言えないのを逆手に取ってだね、ＯＫしてもらったって私達が勘違いした事にして、その気まずさを上手く利用して

ブタさん達に帰ってもらうとか、そういうのできないもんですかねノラリスや？」
「勝手にウチの名前いじりなや！　つかお前ホンマに戦う気あるんか！？」
　ボケと突っ込みが成立している二人の様子を俯瞰していて、ＸＸはあの二人案外相性いいな、とか、オークも若干は話が通じるんだな、とか、俺もうこのギルド解散しようかな、とか何とか微妙な感動とか困惑とか覚えつつも
「まぁ、紳士タイムはこれで終了か」
　身体を半身にし、黒のキャリッジリターンを肘に乗せる様な格好で構え、リアサイトとフロントサイトで作った照準からややズレた位置にオーク@ブーの頭を乗せ、そっと引鉄を引いた。
　野良々の耳が風切り音を捉えた直後、前足をクロスさせて全身で交渉決裂を宣言していたオークがビクンと震え、それからジワジワと、その頭から赤い血を滴らせ、丁度赤い帽子を被った様な塩梅になると、ズズンと音を立てて前のめりに倒れた。
　――――『レッドハット』開始の合図。
　それならば、と飛鳥は素早く元の位置に後退し、表情を引き締め、口を真一文字に結び、傍らに突き立てていた愛鋸デイジーのグリップを掴み、一息に引き抜いてグルンと豪快に回転させ、肩へ担いだ。
「すっごい残念ですが、戦闘状況開始っぽいです！」
　左手でスターターを引き絞り、デイジーにギュインギュインとけたたましい咆哮をあげさせた。その様にオークの最前列は、一歩だけとは言え、しかし確かに後ずさりした。
　飛鳥は不敵な笑みを浮かべる。
「そして皆さん、これから根絶やしです！」
　大上段に振りかぶってから一気に間合いを詰め、手近な一頭に、その巨大な鋸を袈裟の型で豪快に斬りおろした。鮮血が夜空に舞う。
　オークはギルドの間でブタと馬鹿にされてはいるが、しかしその皮はなめしたように硬く、肉は緊密で、骨も木の幹のように太い。

故に鈍器だろうと鋭器だろうとその身体に一撃で致命傷を与えるのは極めて困難であり、飛鳥の膂力と大型チェーン・ソーの重量を持ってしても刃は胸の半ばで停止した。
　これがただのクレイモアやツヴァイヘンダーのような両手剣であれば飛鳥の命はそれまでであり、肉に挟まれた剣が引き抜けずに苦闘している間にオークの怒り狂った戦斧を受け、あえなく戦死したであろう。しかし彼女が手にしているのは他でもない。
　デイジーである。
　打ちおろした時の衝撃力で一時的に刃の回転が止まったとは言え、飛鳥は間髪いれず再びスターターを引くとそれは我に返ったように呻りをあげてそのまま脇腹までを切断しきった。
　身体を斜めにバッサリとやられて上半身が滑り落ち、そこから鮮血を噴きあげているオークと、そのシャワーを浴びつつも未だギュインギュインとデイジーを暴れさせている彼女に、オーク達の怒りと視線は釘で打たれたように張りつけられた。
　胃の底が震えるような咆哮の嵐を受けても、しかし飛鳥も野良々も怯まない。
　そして同時に、故に全く、この間にＸＸによって放たれた正確無比な弾丸により最後列のオーク数頭が死の赤帽子を被らされ、息絶えていた事などにも、オークの群れは気付きもしない。
「後退します！」
「あいよ！」
　怒り狂ったオークの突進とその一撃をバックステップで二人はかわし、そのまま作戦通り緩い円を描く様に後退しながら群れの先頭を引きつけ、陣形を崩して行く。
　もちろん所詮はオーク。群れは陣形と呼ばれるほどの体をなしてはいなかったが、それでも一応纏まりを保っていた為、そのまま切り崩すのは容易ではなかった。
　しかし今やオークどもは怒りに我を忘れ、すっかりと飛鳥と野良々に誘導され、いつの間にか群れは糸に引かれた布のようにほそく

ほそくなっていた。
今が頃合い良しと、飛鳥は再び先頭のオークに狙いを定め、各個撃破遂行とばかりにデイジーのスターターに力を込めたのだが
「ギィィィィ！！！」
という醜い悲鳴。自分の間合いに入るよりも先にそれが一頭、否、二頭と崩れていく様に、果たしてこれは何事かと思ったが、何の事はない。野良々の仕業だった。
彼女が飛鳥と共にバックステップでオークの追撃を交わす際、目にも曖昧な速度で鞘を払ってその血走ったオークの目に一閃を放っているのである。
彼女は飛鳥のような並はずれた膂力こそ持ち合わせてはいないが、しかしそれを補って余る程の速度と技術をその小さな身体に兼ね備えているようだった。
涼しげな顔――まぁもともと群青だけど――でそんな離れ業をやってのける野良々の横顔をチラっと見て、飛鳥は酒場で見た彼女のギルドカードを思い出す。
称号『極東の剣豪』。
通り名『鎌鼬』。
今となってそれは実に納得出来たし、そして自分のは恥ずかしくて見せられないなと、飛鳥はちょっと照れた。
釣鐘塔の頂上に位置取りし、風を読み、動きを読みで一頭一頭を確実に仕留めて行くＸＸは、しかし野良々の予想外の健闘にも心の潮騒は止まない。展開は順調過ぎるほど順調だし、このまま行けば依頼は間違いなく完遂することだろう。
しかしながら、彼がこのかたずっと気にしいているのは、ビスケット村の村民の避難先の教会、そこで護衛任務についている帝国正規軍ベオウルフの存在である。
最悪援軍要請の可能性もあると、彼は朝のうちに教会を訪れてその陣容を確認していたのだが、工房で野良々が言っていた通りに、その全てが弓兵で、それも見るからにそれと分る新兵だったのであ

る。
無論オークを相手に兵士風情が剣一振りで白兵戦を挑むなど無謀の極みではあるが、しかし教会の護衛任務――拠点防衛に必要となるのは明らかに弓兵ではなく槍兵である。
槍兵は近接武器においてはその圧倒的リーチの長さゆえ、例え新兵の寄せ集めであったとしても陣形と指揮次第で一定の拠点防衛力が保障される兵種である。
例えば槍を放射状に突き出す密集陣形のファランクスなどは、展開するただそれだけで突破困難なバリケードとなり、単騎能力では最強と言われる騎兵に対してさえ、それは最強のトラップとなり得るのだ。
一方教会に派遣されている弓兵にも、確かに遠距離攻撃可能と言う他の兵種にはない大きなメリットがある。
しかしその火力はそれを扱う弓兵の技量に大きく依存するため、録に射的の訓練もしていないボンボンの新兵による弓兵など、単なる兵糧潰し以外何物でもなく、まして風の強い夜ともなれば矢を無駄にするだけであろう。
――――どういうつもりだ、ベオウルフは。
ＸＸは忠実に敵を引き寄せている部下二人の姿を見守りながらも、オークを着実に仕留めて行きながらも、その不安をどうしても心から拭えなかった。
改めて状況整理し、不安の原因を再構築しようと
「まさか！？！？」
散らばった点が線で結ばれ、一つの図形が完成した。
――小高い丘に囲まれた作戦地域。
――火薬の産地として有名なビスケット村。
――オークの群れを引きつける二人。
――教会に集まった弓兵。
――これだけの火薬量を一か所に集めたら、火矢一本で俺はお陀仏だなぁ

ＸＸは弾薬箱を踏み越えて釣鐘塔の南側に回り込み、目をすがめて教会に続く茂みを凝視した。
そこにまさに、最悪の予感が的中。
あれは教会で待機し護衛任務についているはずの弓兵による一個小隊、ベオウルフに間違いない。
村のすぐ傍の茂みで、月明かりに甲冑を濡れさせている帝国正規軍おおよそ４０名。それらが沈黙の合図の元、一斉に矢の先へ『点火』するのが見えた。
「おいおいおいマジかよ！！」
ＸＸは即断即決で中折れ式のラインフィードから実弾を抜いて素早く信号弾を込める。そして今尚オークの群れを削っている飛鳥と野良々の足元に向け、発射。
きりもみで飛んできたオレンジ色の光線に飛鳥と野良々が釣鐘塔を振り返ると、ＸＸが身を乗り出して集合の合図をかけていた。
「昇ってこいってっか？　いくら釣鐘塔が煉瓦造りでもオークのクソ力やったら」
「御主人様の命令は絶対です！　行きましょう野良々ちゃん！」
「あいよ！」
バックステップで一頭の目を払ってから、彼女は狼さえ抜き去る様な早さで釣鐘塔まで駆け寄り、梯子に飛びついてからも昇るのでも駆け上がるのでもなく、７段飛ばしに飛びあがってからフワリと頂上に着地した。
つくづく人間離れしたことを平然とやってのける死体少女に、しかしＸＸはそんなものに驚くよりも先に、野良々に状況説明するよりも先に
「そこの弾薬箱出来るだけ遠くへ放り投げろ！」
「へ！？　これってあんたの武器と」
「良いから急げ！」
ただならぬ剣幕に理由も分からずとりあえず言われた通り、手当たりしだいに掴んで――と言う訳にはいかず、それは彼女に些か重

たすぎたようで、「ふんぬぬ！」と奥歯を食い縛りながら両手で持って、ＸＸの３分の１ぐらいのペースで放り投げ出した。
ズダン！　という地を割る様な音と振動は、今しがた一息に飛び上がって頂上に着地した飛鳥である。コイツもコイツで化け物だ。ＸＸはその姿を見るなり
「そこの弾薬全部投げ捨てろ飛鳥！！」
と叫ぶと同時、南の空に無数の火の玉が打ち上がった。咄嗟の事ながらも彼女はそれで全てを理解し、手当たり次第に掴んで
「どっせいどっせいどっせいもいっちょおらーーい！！」
と球投げの如くポイポイポイと軽々しく放り投げ――ている最中に
「伏せろ！」
ＸＸは二人に覆いかぶさるように押し倒した、刹那、右や左や上を流星か火雨の如き勢いで火矢が通過し、そのまま村に降り注いだ。
矢に打たれた木造藁ぶきの民家は見る間見る間に炎を広がらせ、瞬く間に村が炎の海に飲みこまれた。
あちらこちらで爆発が起きているのは、恐らく自分達が投げた弾薬箱に引火したものだろう。
釣鐘塔に殺到し、その戦斧で煉瓦造りの壁をガンガンと叩き削っていたオークどもだったが、しかし自分達を轟々と取り巻く炎の嵐にすぐに「ブギーブギーブギー」とパニックを起こし、散り散りバラバラとなった。
村から逃げ出そうにも、しかし入りは降り故に問題なかった小高い丘も、登るとなればオークどもを阻むに十分だったらしく、さらには互いに互いを押し退け合い妨害し合い、なんと惨めかな、最後は結局銘々に焼死した。
「……ブタの丸焼き」
呟かずにはおれないゼンマイ式。
草木の焼ける匂い。
肉の焼ける匂い。
硝煙の匂いなどに取り巻かれる中。

飛鳥は四つん這いになって、村が焼ける様子をただ茫然と見ていた。
避難する村民達を見送る際、彼女は村を離れるのを渋っていた一人の少女にお願いされたのである。
出来るならば戦をさけて、オークとはお話をして、村の大切さを分ってもらって、戦いのヒドさも分かってもらって、それで森に帰ってもらうと――村を傷付けないと。
もちろんそんな事が可能かどうかは、流石の飛鳥も承知している。
ギルドが命を賭して行う作戦に、そんな子供のワガママを通す余地はないし、そもそもオークは話の通じる――若干意外な展開もあったが基本的にはもちろん――連中でもない。
しかしそれでも、彼女は精一杯に背中のネジを巻いて考えた末、最悪でも、自分達は火器の使用を極力抑え、村はまた住めるような状態で返してあげると、そう固く約束したのだ。
その為に飛鳥はＸＸに対して駄々をこね、ある意味で作戦以上の労力で以て、ギリギリまで倉庫の火薬を地下に避難させていたのである。止むなく使う分にしても、こうして燃える心配のない煉瓦造りの釣鐘塔の頂上に、ＸＸは、しかし飛鳥にさえも黙って運び込んでいたのだ。
それなのに一体これは、
「……一体、何が起きたんですか、これ？」
小さく震えつつ、飛鳥はＸＸの様子を窺って
「も、もしかしてこれは御主人様の作戦ですか？　った！」
ＸＸがコツンと飛鳥の頭を叩いたのは、彼女の強張った緊張を解す為である。
「自分の部下を犠牲にする様な作戦立てるバカがどこにいるかよ。……野良々、オメェはもう気付いてるか？」
片膝を立て、太刀を片腕に抱いている彼女は頬の煤を払いながら言った。
「連中のやりそうなこったよ。オーク１００頭を村人の犠牲なしに

弓で撃退したとなりゃそりゃスゲー箔がつくやろね。死んだのは何処にでもいるギルドマスター一人とゼンマイ仕掛けのメイド一機、オプションで少女の死体だ。そんな程度犠牲とも思っちゃくれないだろうし、この中じゃ骨だって残るか怪しいもんだぜ？」

そして炎の立てる音の合間を縫って、南から微かに聞こえる弓兵たちの勝鬨に舌打ちした。

ＸＸは帽子を深く被り直し、無言で立ち上がる。野良々は顔をあげて

「おい旦那。まだ火は収まっとらへんし、もう少しここで」

「ああ。確かにそう簡単に収まんねぇわな。こりゃぁよ」

と、投げそびれていた弾薬箱の一つを掴み、それを思い切り南の空にぶん投げた。

夜空を焦がす炎に照らされたそれの描く放物線を、野良々と飛鳥は目で追いながら、

「まさかそれ」

「まさかそうだ」

発砲音二つの直後、弾薬箱は中空で派手派手しく爆ぜりながら炸裂弾となって弓兵達の頭上に降り注いだ。勝鬨が止んでそこかしこで悲鳴があがる。

弾丸は銃身内で加速を受けて初めて威力を発揮するものであり、このように箱詰めして適当に引火し衝撃を加えただけでは爆竹に毛が生えた様な威力しかない。故に甲冑を帯びた兵士相手にはコケオドシ程度にしかならないが、そんな事はもちろん、銃の扱いになれたＸＸは理解していたはずである。

しかし当たり所が悪ければ、例えコケオドシ程度であっても重傷・致命傷を負う危険性はやはりあり、もちろんその事に関してもＸＸはよく理解しているはずである。

そしてその上で、一ギルドマスター風情が帝国正規軍に攻撃をかけるという暴挙に及んだとあれば、もはや野良々にも飛鳥にも何も言うべき事はなかった。

二人が無言でＸＸの背中を見つめていたら、彼はやがてその前を通り過ぎて
「お前ら、ちょいとここで休んでてくれ。すぐに戻る」
「あ、御主人様どちらに？」
梯子に片足を引っかけているＸＸに対し、飛鳥が不安そうな表情を浮かべて手を伸ばすと、彼はその手を取って優しく微笑んだ。やや強張った表情を浮かべている野良々にも、静かに頷いて見せる。
「今日はお前達、本当に良く頑張ってくれたな。ありがとう。……よし、飛鳥は来月の給料５割増しで、野良々は追加報酬で＋７００Ｇだ。それじゃぁ待ってて――」
「そんなのいらないです！」
飛鳥がＸＸの手に力を込めて、そして哀願するような目を向けて言った。
「お給料は、いらないです！　今回のだって、別になにもいらないです！　何なら、もう私このまま廃棄処分でもいいです。だから、お願いです。だから、だから、」
今はここにいて下さいと、彼女はそう言った。
その目には今まで見た事がない、つまりは初めて見る、飛鳥の、ゼンマイ式人形の涙があった。
ＸＸはどうしたもんかと溜息を吐いてから頭を掻いて、やがて何か思いついたらしく、彼女の煤けて血まみれのエプロンドレスのポケットに目をやり、にやり。
「そのトレトレリンゴどうしたよ？」
「ほぇ！？」
と言う間に彼は飛鳥の手を離れて滑るように梯子を降り、着地。炎の合間を縫って丘を一気に駆けあがって――――しかし。
しかしそこからはゆっくりと。
実にゆっくりと。
自分の存在を顕示するようにゆっくりと。
自分の存在を誇示するようにゆっくりと。

燃え盛る炎を背にして。
青白い月を頭上にして。
今尚、情けない声をあげている弓兵小隊の元に向けて。
ＸＸは練り歩いた。
「だ、誰だ貴様は！？　名を名乗れ！」
ベオウルフの弓兵の一人が、その異様な赤い影に気付いて腰からショートソードを抜き、大きな声をあげた。
現れた赤い影は深々と帽子を被っている為、その顔も表情も伺えなかったが、しかし口角を釣り上げるように笑んで、
「へへ、生憎だが火つけ盗賊風情に名乗れるような安い名は持っちゃいないんだよ。俺はさ」
「ひ、火つけ盗賊だと！　我らは栄えある帝国正規軍ベオウルフぞ！　帝国正規軍への侮辱は即ち帝国への」
「お～っと、帝国正規軍ベオウルフと言えば今はビスケット村から避難した村民とその避難地点である教会の護衛任務についているはずだが？　まさか一小隊が帝国直々の命令に背いた、なんて言うんじゃないだろうなぁ？　見え透いた言い訳はよそうぜ？」
そしてレッドハットのツバを右手で少しあげ、小隊長と思しき男に鋭い眼光を射かけ
「盗賊さんよ？」
飛鳥は持ち前の聴力を利用して、その一部始終を聞き、その一部始終を野良々に中継し、そして解説を求めた。
野良々は、四つん這いの姿勢で真剣な眼差しを向けている彼女に、頭をポリポリと掻いて端的に答えた。
「旦那、あのまま『火つけ盗賊』でベオウルフをやるっぽい」
ベオウルフの小隊長は天国から地獄へ急転直下だった。
突如現れたこの得体の知れない、赤い外套と赤い帽子の男は、自分が先ほどの卑劣な炸裂弾――コケオドシだけど彼には怖かった――を放ったと言い、そしてそれはオークの襲撃にかこつけた火つけ盗賊討伐の為だと言う。無論それは事実ではない。嘘偽りなく自分

達は栄えある帝国の正規軍、ベオウルフである。
　しかし自分達が火付け盗賊ではなく、帝国正規軍ベオウルフだと認めれば、正直なところ、この男の言う通り命令違反で厳罰は免れないし、最悪は軍令違反で縛り首もあり得る。
　何れにせよ、少なくともこのままでは、自分達が用意した『オークの教会侵攻を未然に察知し、奮戦の結果として村の火薬庫でオークが暴れて誤爆を起こしたものの、しかし村民の命は守り通した』という筋書きは、この男がいる限りは生かせないのは確実である。
　ならば、結論は一つだった。
　兵士たちが誰からとなく、弓を置いて腰からショートソードを抜いた。
　どうやら同じ結論に辿り着いたらしい。
　負傷兵がいるとは言え、相手は一人。こちらは一個小隊。まだ３０人から戦える。
「ようやく身の振り方が決まったかい？　そんじゃまぁ始めますか」
　赤い影ははニヤリと笑ってから、腰に収めた愛銃二丁を――――ではなく、さらに背中側に収めている『それ』を引き抜き、クルクルクルと掌で回転させながら腕をあげてピタリと、肩の高さで『それ』を止めた。
　『それ』はＸ型の形をした、極端に刃が短くて、極端に鍔が長い、見たことも無い、しかしどうやらダガーナイフのようだった。
　手に握られた、ＸＸ。
　『それ』を掲げて赤い影が笑う。
「折角だ火付け盗賊。お前さんらも通り名として『ベオウルフ』を名乗るなら、俺もそれぐらいは名乗ってやるよ。レッドハット・ダブルエックスだ。いいか？　レッドハット・ダブルエックス。忘れんなよ？　しかしどうだ？　知名度皆無だろ？　そりゃそうさ……」
　ニィと犬歯を剥いた。
「聞いて生きてた奴が、このかた皆無なもんでな？」

帝国軍と各種ギルドが連携した大規模なオーク討伐作戦。それに際し、ビスケット村の避難先として指定されていた教会の護衛任務に当たっていた、正規軍ベオウルフの一個小隊が消息を絶ったと言う連絡を、帝国は翌朝に受け取った。

その日のうちに、ビスケット村には帝国の偵察団が派遣されたが、村は見るも無残に全焼しており、連絡を受けた村民達は皆悲しみにくれた。

夕刻になって、偵察隊により、北の森にて捜索中のベオウルフ全員が、全裸で木々に縛られていながらも存命という情けない格好で発見された。

救出後、部隊を率いていた小隊隊長から事情を聴取し、その結果、彼らは目先の功績を目当てとして帝国命令に背き、村に火矢を放った事が明らかとなった。

村に貯蔵されていた火薬の大部分は、作戦前に工房を利用していたギルド『レッドハットと愉快な仲間達（飛鳥命名）』が地下へと退避させていた為、被害はそれでも小規模に抑えられたと見られている。

これを受け、後に帝国は、ギルド『レッドハットと愉快な仲間達（飛鳥命名）』に相応の恩賞を与えると言う決断を下した。

「だぁってさぁ！」

と、待合酒場グウィンドリンの裏口にて、青い三日月を酒の肴にしつつ、ＸＸと飛鳥と野良々はささやかな祝杯をあげていた。

まぁささやかとは言っても、普段の一日当たりの食費の数倍ではあるため、これは彼らにとってかなり格好のつけた言い方である。

七面鳥の丸焼きをものすごい勢いで頬張っている飛鳥は、口から肉だの骨だのの欠片を飛び散らしながら記事を読み上げていて、それに真正面から被弾しているＸＸは内容に相槌を打ちつつも、

「なぁ飛鳥。オメェもうちょっとお上品に食べれねぇ？」

無駄と分りつつも声をかけていて、野良々は防腐剤の袋を片手に

アッハッハッハと生きの宜しい声をあげていた。
「せやけど、旦那さ」
「ん？　なんだいノラコ？」
妙なニックネームついたな、とか思いつつも
「もう仕事も済んだんやし、これ以上ウチみたいな死体の傍におったら、せっかくもらった栄誉も名誉も台無しなるで？　今は酒場ん中も旦那の話題で持ち切りなんやからさ？」
クイクイクイと、親指で、「飛鳥と一緒に中に入れば？」と彼女は促した。
それから彼女は懐からギルドカードを取り出して、契約終了のサインを求めようと、つまりは早々に別れの挨拶をすませて二人の為に御暇しようとしたのだが、しかしＸＸはそれに溜息を吐き、押し返した。
野良々はその仕草とその様子に苦笑したものの、しかし微かに項垂れた。
「っはっはっは。せやんな。やっぱり普通は討伐対象のアンデッドとの共闘記録なんてギルドに残さんほうがええよな。悪い悪い。いや、ウチも分ってたしこれまでもずっとそうしてたんやけど、つい飛鳥のノリが移って、ちょっと呆けてたんやな。っはっはっは」
という彼女のセリフはガン無視し、ＸＸは自分のトレードマークであるレッドハットを外しておもむろに彼女の頭に被せた。
その意味をよく知っていた彼女はショックのあまり、自分の生命線とも言える防腐剤の袋を落としかけ、それを飛鳥がキャッチ――代わりに七面鳥転落死@うそーまじかー！？――
「……ったく。ビスケットの夜空をマスターそっちのけで独り占めしようなんて、随分とまぁ傲岸なギルメンが入ったもんだよ」
その言葉に飛鳥はガッツポーズを取って――三秒ルール適用で回収した七面鳥今度こそ死亡――、そして野良々は、野良々は、野良らは目からつまらぬものが出そうになって慌てて顔を伏せて、顔を伏せていて、肩を小さく揺らし始めた。

ＸＸは彼女に被せた帽子の上に手を置いて、ほんの少しだけ乱暴に撫でてから再び自分に被り直した。簡易的なギルドメンバー正式加入の儀式である。
そして彼は懐から自分のカードを取り出して彼女に握らせ、
「次の依頼が入るまではのんびりやっか。ちょっとションベンとか行って来るから」
「あ～、御主人様食事中に下品～」
「うっせ。オメェにだけは言われたくねぇわ」
と、その場を立ち去って行った。もちろん野良々にはそれが、彼が、自分が涙を拭うためにくれた時間なのだと分っている。しかしそれを思うと逆効果で、今の状況は拍車をかけてくるし、どうしたものか。
けれどもそれを早く拭わない事には何時までもＸＸが帰ってこれないので、野良々は指を目がしらに当て――る前に、飛鳥がそれをハンカチで拭いてくれた。
それは野良々にとって生まれてから初めての経験でもあり、死んでから初めての経験でもあった。
度重なるショックで思わず茫然としていたら、飛鳥はハンカチをポケットにしまってから、口に手を当てて「しっしっし」と笑った。
「ああ見えてご主人様かなり涙もろいんすよ。っへっへっへ。どうせ今頃茂みでビービーやってますよ。冷やかしちゃうかいノラリスや？　私はモチいきますが」
意地悪な猫みたいに笑う飛鳥の顔を見ていたら、野良々もなんだかおかしくなってきた。
次に彼を呼ぶときは旦那のままで良いのだろうか？　それともマスターの方が良いのだろうか？　とりあえずビスケットの夜空を見ながら、そんなどうでも良くて、素敵な事を考える事にした。
「ぷぎゃー！　御主人様泣いてるし！　うぇっうぇっうぇ！」
「うっせゼンマイ式！　お前の給料５割増しはトレトレリンゴで帳消しだ！」

「ほぇ！？」
「藪蛇やなぁ、ほんまに」

『レッドハット・ダブルエックス』　了

ギルカ一覧

登録名：不立文字飛鳥
通り名：なし
膂力評価：A
技量評価：E
素早評価：D
知力評価：G
総合評価ランク：D
称号：ヤンチャなお手伝いさん
コメント：将来はたぶん御姫さんです。みんな、クラスチェンジを信じて私に貢いでおこうぜ？

登録名：リトルリビングデッドアンデッド野良々
通り名：鎌鼬（カマイタチ）
膂力評価：E
技量評価：A
素早評価：A
知力評価：D
総合評価ランク：B
称号：極東の剣豪
コメント：生者が死んで死者になるなら、死者が死んだら生者になるんかな？　わからん

登録名：XX

通り名：レッドハット
膂力評価：D
技量評価：B
素早評価：D
知力評価：C
総合評価ランク：C
称号：冴えないギルドマスター
コメント：食費がヤバイ。ゼンマイ式のせいで食費がやばい。

登録名：抹消済み（帝国親衛隊イージス除隊処分につき
通り名：レッドハット・ダブルエックス（履歴
膂力評価：C（履歴
技量評価：SS（履歴
素早評価：B（履歴
知力評価：C（履歴
総合評価ランク：抹消済み
称号：赤色の鬼札（履歴
コメント：抹消済み

第一話：レッドハットダブルエックス（後書き）

どうも常日頃無一文です＾＾

活動報告での予告二つ目、ファンタジーものです。
例の『掴んだ不思議な感覚』というのを形にしてみたのですが、もう少し馴らしが必要ですね。

そんなことより『お前また連載作ってアホか』とか思われるかもしれませんが、
その辺りは一話完結形式で対応しようと思います。故に何時の時点でも終了可能な状態です。
なので、一話あたりの分量は初期ルーチェの数倍になると思います（今話も3～4倍ぐらいでしょうか）。

宜しければお付き合い下さい＾＾

第二話：雷光の槍

帝国親衛隊。その又の名をイージスと言う。

由来は言わずもがな、ギリシャ神話における最高神ゼウスが、神の世界に存在する全ての邪悪を打ち払う為、愛娘であるアテナに授けた全能の盾である。

そんな大それた名を冠するその部隊は、構成員僅か7名と言う、戦術単位的には分隊でさえなく班と呼ばれる極めて規模の小さなものである。しかしながら、イージスに名を連ねるその一人一人が、まさに一騎当千と評されるに値する豪傑であり、ひとたび戦場で剣や矛を振るえば、嘘偽りなく、たった一人で戦局を一変させるほどの戦果をあげると言われている。

そのイージスにおいて、6人を束ねる7人目、即ち長として君臨しているのは、しかし剛腕怪力を振るう山の様な男ではない。眉目秀麗の美丈夫である。

その通り名は、イージスを預かる者にこそ相応しい、守護神アテナ。

出で立ちもまた神話をなぞるように、アテナはいつもメドゥーサの描かれた盾を左手に持ち、右手には一薙ぎで天を切り裂くとまで言われた『雷光の槍』を携えていた。

しかしながらその振る舞いだけは、守護神アテナではなく、それと不仲であった軍神アレスのそれに近く、アテナは敵にも味方にも容赦がなかった。

だからこそ、ビスケット村で軍令違反を犯したベオウルフの小隊長が、自分を裁きに遥々と教会にやって来る上官が、あのイージスのアテナだと聞かされた時、彼の顔は蒼白になった。

それでも一縷の望みを抱き、教会に現れた馬上のアテナに対し、部下共々騎士の礼を取って跪いていたら、アテナは馬から降りるや否や彼に近付き、腰の剣を抜いてその鼻先に突きつけ、目を眇めて

言った。
「貴様、何故我の到着を待たずに自害しなかった？　どれだけ我がその報せを待ちながら行軍を遅らせたと思っている？　よくも今まで長らえて生き恥を晒していたな」
その言葉に、ベオウルフの隊長は改めて自分の認識の甘さを痛感した。
「その浅ましい軍功を得ようとしていた事に、何か申し開きでもあるのか？」
ベオウルフの隊長は、突き付けられた剣の鋭さではなく、アテナの放つ威圧感に滝の様な汗が流れ、うんともすんとも言えなくなった。
「二度は言わぬぞ。立て」
「は！」
すぐに起立したが、その直後、クラブで殴られたような衝撃を顔面に受けて転倒した。左拳で殴られたのである。そのたったの一撃で、彼の奥歯は二本も欠けた。
「二度は言わぬぞ。立て」
隊長は鼻から血を流しつつもガクガクと膝を震わせて立ち上がり、再び殴打されて転倒。アテナは再び『立て』と命令し、殴打、転倒。
同じような事を数度も繰り返し、やがてとうとう彼は立ち上がれなくなった。アテナの拳を受けた顔は、いつもの倍に晴れ上がり、鼻柱は潰れ、唇は裂け、前歯は全て折れていた。
アテナは返り血も拭わず、冷徹な眼差しでベオウルフの隊長を見下し、そして告げた。
「着様の領地と財産は全て没収し、それらを全てビスケット村の復興に当てるものとする。騎士の爵位も今をもって剥奪だ。分ったな？」
次に視線を、無言のままに震えていた隊員達に向け、アテナはそれこそ、まるで斬り裂くような鋭さで彼らを見渡した。
「我はこれよりビスケット村の視察に赴く。夕刻には戻るが、それ

までに――」
　アテナは自らの剣をその場に放り投げた。ベオウルフ達の視線が、草場に沈む長剣に移る。
「お前達はこれでケジメをつけておけ。それが納得のいくものでなかったら、お前達全員を縛り首に処す。覚悟しておけ」
　そう言い残してから馬の手綱を握り、アテナは彼らにはもう目をくれず、そのまま歩いて教会を後にした。
　アテナはその足で馬屋に寄り、愛馬を繋ぎとめて牧草を与える。そしてその凛々しい頬を撫でながら、アテナは旅の友を優しく労った。
　公式では、アテナがここに赴いた理由はビスケット村の視察と、ベオウルフ小隊の処分となっているのだが、それはアテナにとってあくまで建前であり、本当のところは別にあった。
　教会の裏手では、今もビスケット村の村民達の一部が避難生活を送っている。
　簡易的に作られた小屋で、炊事や洗濯をしているのは、主に老人や女子供ばかりで、力のある男達は早速、ビスケット村再生の為に、村で汗を流しているのだ。
　アテナは、常人ではろくに身動きも取れないであろう自らの重装甲を振り返る。銀と青とを品良く組み合わせ、全身に唐草の文様をあしらった拵え。
　もちろんこの出で立ちのままで、アテナがビスケット村を訪れたなら、例え村民達に対し『楽にしてくれ』と声をかけたところで、彼らは戦々恐々と畏まってしまい、確実に仕事の妨げになってしまうだろう。それはアテナにとって極めて不本意な事だ。そしてそれは、今、枯れ枝を拾い集めて食事の支度をしている女達にとっても、同じ事である。
　そういうわけでアテナは、悪戯な騒ぎを起こさぬ為、木蔭に身を潜めて様子を窺い、彼女達のうち、手頃な一人に接する機会を伺っていたのである。

そしてちょうど、自分と同じ背格好であると思われる村の娘が、近くを通り過ぎたので
「すまぬが少し良いか？」

ビスケット村の南の茂みを真っ直ぐ進むと、二筋の清流が横切っている。
東向きに川沿いを辿って行けば、この二つの川は同じ源流であることが確認できるため、ビスケット村の村民からは揃って兄弟川と呼ばれている。
その兄弟川のうち、兄側――北側の方、そこを跨ぐ橋のたもと近くの川べりに腰を降ろし、午後の陽ざしを受けて星屑のように光る川面に向け、小石を投じているのはギルド『レッドハット』の野良々である。
彼女が今回、ギルドマスターであるＸＸから授かっている仕事とは、村と教会を往来する村民の道中護衛である。依頼主は村長で、依頼料は２００Ｇ。それは普段なら歯牙にもかけないような端金であるが、事情が事情、成り行きが成り行き。同じギルドに所属する不立文字飛鳥が勝手に受諾し、ＸＸに対して事後報告という形式を取っていたのである。要するに『やっちゃった』。
野良々としては別に、その金額がいくらであれ特に不平はないし、不服も無い。しかし今の自分のこの状況だけは、どうにも納得がいなかった。
重労働と言う意味では、今もビスケット村で瓦礫の撤去や、廃材の解体、木材の運搬などで煤けているであろう飛鳥の方が、圧倒的に割を食っているのだが、しかし彼女が問題にしているのはそこではない。
「ふぁ～わ……」
にゃむにゃむと口の涎を弄びつつ、目を擦る。
早朝こそ、村民の移動に付き添ったり、昼夜を間違えて襲ってきた寝惚け山犬の牙や爪を裁いたりと、それなりに身体を動かす機会

があったのだが、朝食の時間が過ぎてからは、もう御覧の有様。こうして優しい日の光を浴びつつ、手近な小石を適当に拾っては清流を乱すばかりの、単純なお仕事である。さて、どうしたものだろうか、昼寝でもしようかしら。でも死体と間違われたら嫌だな、まぁ死体だけど。

一応、村では優しい飛鳥ちゃんが『ギルドには可愛い死んでる女の子がいるから間違って燃やしちゃダメですよ？』とか、何か微妙な言い回しで色々言い触れ回ってくれているらしいが、それでもこの群青色で大の字に転がっていたら、耄碌したお爺さんとかお婆さんとなどが通りかかると『あ～あ、まだ年端もいかんじゃろうに惨いことじゃ』とか哀れみつつ、お花とか添えてきかねない。そんで自分が唐突に目覚めるとかで、彼らを昇天させかねない。野良々は誰にも聞かれぬ溜息を吐いた。死者には死者の悩みがあるわけである。

と、そんな折り。教会の方から人影がしずしずと歩いてくるのが見えた。

野良々はよいしょと立ちあがり、手で陽ざしを遮って誰何する。

ブラウスに青のベストを締め、ロングスカートにエプロンを下げた、ごくごく普通の村娘の格好であるが、しかしなにやら全身の醸し出す雰囲気がやんごとなき、である。背は自分より高いが、飛鳥よりはやや低そうだ。

髪はブロンドで、解いて流しても精々でショートだろうが、後ろできっちりと束ねてある。色白で碧眼。どうやら飛鳥と同じ出身――最も彼女はゼンマイ式であるが――のようだ。

しかしなによりその立ち振る舞い、例えば足運びや重心の動かし方一つに、野良々は自分が剣豪だからこそ分る、隙の無さをヒシヒシと感じ取っていた。

「あの、ギルドの方ですか？」

自分を認めてから近寄り、にこやかに話しかけてきた彼女に、

「そうやけど、アンタはビスケット村の……えっと」

野良々は気さくに応じるも、その親指は柄にかけ、半身にしている。
「はい、そうです。馬屋の餌遣りを担当していたアリシアと言います。確認が必要でしたら、名簿帳の方に目を通して頂ければ分るかと思いますが」
愛想の良い娘だった。野良々は張っていた肩の力を抜き、表情を和らげる。
「いやいや、ええよ。そう言うのはさ。それでその、アリシアちゃんは村に用事って事でええんかな？」
彼女は丸越しだった。衣服のどこにも、ナイフ一つ隠し持てるような場所がない。それなら、剣を手にした自分が恐れるに満たないだろう。そう判断したのだ。
「はい、そうです。ですので、ビスケット村までの護衛をお願いできないかと思いまして……宜しいでしょうか？」
おっかなびっくりと伺う様な表情は、ただただ品よく、愛らしい。少なくとも悪党ではなさそうだ。それが分れば十分である。
野良々は、ようやく暇潰しの相手が現れてくれたかと、ウ～ンと緩い伸びをして
「よ～し任せとき！　ギルド『レッドハット』の名にかけて、称号『極東の剣豪』の名にかけて、アンタを無事に村まで送り届けるで！　とは言うても、この時間帯なぁんもないやろけどね」
っはっはっはっと、彼女は陽気に笑った。が、しかし、アリシアと名乗った村の娘は、野良々ではなく、教会に続く茂みの方に、何やら憂いごとを秘めたような目を流していた。無論、読心術などない野良々は、それを穿って推測したところで
「大丈夫大丈夫。この時間帯やから道中は何にも怖いもんあらへんよ。茂みにはまぁでっかい蛙がおるかもせんけど、害も毒も無いしな。教会の方かて軍が駐屯してるみたいやしさ？　それに」
と、彼女は自分の愛刀の鞘を掴んで腰から外し、アリシアに突き出して見せ

「万が一オークが襲ってきても、この太刀にかけて、アンタを守り切るよ？」
自信満々に、そして甚だ検討違いながら安心させる様な笑みを、野良々は浮かべた。
その向日葵の様な笑顔――でも群青色――に、アリシアは表情を崩してクスリと口に手を当て、そして百合のように愛らしい笑みを浮かべた。
「はい。お願いしますね」

あのオーク討伐戦から三日後の事。帝国からの偵察隊も引き挙げ、教会に避難していた村民達に、『村の様子が見たい』と、飛鳥はせがまれ、今朝。彼女は野道を先導しながらも、一体どんな顔をして、あの子に説明すれば良いのだろうかと、胸の奥をキリキリと痛めていた。
無事に返すと約束した村は全て炎に巻かれ、やはり彼女が暮らしていた家も真っ黒な瓦礫と貸しており、借りていた地下工房に至っては、どこが入り口なのかさえ分らぬという、本当に酷い有様だった。
村の命と言える井戸水も、灰や泥が混じって使えなくなっており、最低限の機能を取り戻すには、早くとも半年はかかるというのがXXの見立てだった。
火薬を扱う村であれば、火事に対して細心の注意を払うのは、勿論、当然の事である。その上で万一に備えて水の確保も十分に行い、家屋も藁ぶきに木材と言った燃えやすいものではなく、不燃性の煉瓦造りとすべきなのは常識である。村の誰もがそれは分っていた。しかし理想は理想、現実は現実である。ビスケット村の近くに良質な石が切り出せる岩場もなければ、それを扱う石工も、村には居ない。居るのは、慣れ親しんだ北の森から、木材を伐採する木こりと大工ばかりである。
村の中央にある、唯一の煉瓦造りである釣鐘塔でさえ、ここのシ

ンボルだからと相当に無理をして、半年と資金５００００Ｇという大金を掛けて、村全体でやっと建てた始末なのだ。最も、そんな労力と時間をかけ、村に建造された釣鐘塔なのだが、しかし役割としては村の時報と子供の遊び道具となるばかりで、村民達は最初のころ、苦笑と共に見上げていたものだった。

無事に残っているものと言えば、精々それだけである。

几帳面に二列縦隊でついてくる彼らを時々振り返っては、飛鳥は静かに溜息を吐く。あの女の子が見当たらないのだ。恐らく、偵察隊から簡易報告を聞いた時に、きっと怒ってしまったのだろう。あるいは、泣いているのかもしれない。

茂みを抜け、無残な村の姿が徐々に徐々に露わになってくるに連れ、やはりと言うべきか、背後で悲しみや落胆の声が漏れ聞こえて来た。

被害は確かに、教会の村人達に対して偵察隊が説明したように、最小限で済まされたのかもしれない。けれども、その最小限は、ここに暮らす人々にとって、相当以上に深い傷を残した事に違いない。ささやかながらも、しかし確かな思い出を育んでいたであろう残骸を見ながら、飛鳥はそう思った。

あるいはそうした過去の記憶ばかりでなく、これからの生活をどうすれば良いんだと悲嘆している者までいて、だから安易な慰めの言葉は、とても飛鳥に掛ける事は出来なかった。

あの時、自分に落ち度はなかっただろうか。

何かもっと上手い手はなかったのかと、無意味と分りつつも自問してしまう。考え得る最善手を、ゼンマイを一生懸命捲いて捻りだしたはずだった。そしてその通りに、戦いは順調に運び、自分も野良々もＸＸも、着実にオークの群れを小さく小さくしていった。村にはほとんど傷らしい傷もつかなかった。

――どうしてこうなったんだろ。

ベオウルフ達のせいにしてしまうのは簡単だった。彼らが火矢を射かけたのが全て悪いと、そう言ってしまうのは簡単だった。けれ

ども、そう言ってしまう事は出来ても、そう考える事が出来ないから、飛鳥は苦しかった。その理由は分らなかった。見つからなかった。もしかしたら、そんなものが分ったところで、見つかったところで、彼らの村が元に戻る事はないというのが、原因なのかも知れないけれど。

銘々に自宅の跡地で肩を落としている彼らを見て、自分でも気付かないうちに涙を零しつつ、「ごめんなさい」と一人呟いた。

ビスケット村に、そのとき大きな鐘の音が響き渡った。

皆一斉に見上げると、村の中央の釣鐘塔で、子供が一人、その小さな身体を目一杯揺らして、鐘を衝いていた。

朝を告げる音。

昼を告げる音。

夕暮れを告げる音。

幸せを告げる音。

そして時々、悲しみも告げる音。

村の歴史の節目も、些細な日常も平等に告げてきた鐘。それはどうやら無事だったらしいと、村民達はこの時気付いた。

煉瓦造りの壁には、オークの戦斧の跡が深々と刻まれている。しかしその戦の爪後も、また釣鐘鐘が生き延びた証。

皆がその音を聞いていて、皆がその鐘の揺れを見ていて、皆がその、元気一杯に鳴らす少女の姿を見ている。

やがて息が切れたようで、彼女は膝に手を当て、息をしているようだったが、しかし。飛鳥の姿を認めると、大きく手を振って叫んだ。

「ありがとーーー！！　飛鳥お姉ちゃーーーん！！　鐘は無事だったよ～～！！」

村を守ると飛鳥が約束した、あの子だった。

だから飛鳥は、その笑顔を目にして、つい蹲って泣いてしまった。

「まっ黒けやなぁ飛鳥」

その華奢な双肩に、男数人がかりで運ぶような瓦礫を乗せ、鼻歌交じりに南の丘を登る不立文字飛鳥を見つけ、アリシアと共に辿り着いた野良々はそんな声をかけた。
飛鳥はかつてないぐらい大活躍だった。もうビスケット村における超英雄になっていた。先のオーク討伐戦なんかも霞んでしまうぐらいの無双ぶりを、愛鋸デイジーと共に如何なく発揮していた。瓦礫の撤去に廃材解体。材木の伐採。灰袋の運搬。もう若干転職とか考えていた。ギルド名を『レッドハットと愉快なキコリ達』にしようとか、もう皆を巻き込む気も若干あった。
飛鳥はそんな事考えつつも、「よ」っと手を挙げているギルメンNo3に気付くと、いつも通り
「やぁやぁノラリスやよくぞ参ったのぉ」
と、担いでいたそれをドシンと瓦礫置き場に寝かせると足早に歩み寄った。野良々は村を一望しつつ
「だいぶ見れるようになったやん。ここ数日風が強かったし、灰は結構洗ってくれたみたいやね」
一昨日から夜通し吹いていた強風のおかけで、大方の灰が村を囲う丘の縁へ張り付くよう寄せられており、飛鳥達が来た時には、さながら履き掃除を終えた後のようになっていたのである。それらは今日午前のうちに、村に来ていた女達が口布をして袋に集めて処分した為、男達はスムーズに作業を行う事が出来た。もしもそうした天候による悪戯がなければ、今頃は板一枚を返すだけでも目が染み、咳き込んで、復興作業は出鼻をくじかれていたに違いない。
「あの、不立文字飛鳥さんですね？」
野良々の傍にいた村の娘が、品のある柔らかな笑みを浮かべた。
「御活躍の程は聞いております。私は村で馬の世話をしている、アリシア・オーランドと申します。此度は本当に何から何までして頂いて、感謝の言葉もございません」
「いえいえいえそんな！　そ、そんなの私が勝手に好きでやってるだけですので！　どどどドレミファソラシどうか気にしないで下さ

い！」
深々と頭を下げているアリシアに、何故か飛鳥はあたふたと恐縮してしまい、むしろ若干テンパっていた。
「え、えっと、改めて自己紹介します！　ギルド『レッドハットと愉快な仲間達』のギルメンＮｏ２、不立文字飛鳥って言います！　よろしくです！」
そして握手の手@真っ黒けをズバっと差し出す。そうか分った。このアリシアちゃんの醸し出す貴族めいた雰囲気がアタシのメイドセンサーを刺激してくるからだぜ！@飛鳥想
「なぁ、その『愉快な仲間達』って正式名称なん？　『レッドハット』だけでようない？」
そんな真っ当な死体少女の指摘に対し、
「え～、『レッドハット』だけだったら御主人様のワンマンギルドみたいで嫌じゃない～？」
飛鳥の唇がブスーっとεの形になった。
「いや、別にそんなことないやろ。あれってただの戦術名やしさ、何て言うかなぁ、ウチはその『愉快な仲間達』って言うのがどうにも痒うて」
「え～痒いかな～？　ん～？　あ、それ単にノラリスがナウ腐っティングしてるとかじゃなくて？」
「言いにくい事ばっさりいいなや！　ちゃんと防腐剤ガッツリ食っとるわ！」
野良々の突っ込みに「へへへ」と笑みを返しつつ
「冗談冗談。例えノラリスが腐っティングどころか腐っティッドになっても私の愛は変わらんぜ？　へへへ」
野良々は半眼ジト目になって
「腐っても飛鳥の愛はごめんやわ」
「ノラッチも結構シビアなこと言うよね？」
「また変なニックネームついたな、ウチ」
とそんなやりとりを、クスクスと笑っていたアリシアに二人は気

付いて、揃って頭を掻いて苦笑した。と、いつまでも突き出しっぱなしだった握手の手が、今更になって煤だらけだったことに気付き、飛鳥は慌てて
「これはこれはバッチイものをば」
「いえそんなことないです」
引っ込めようとした手を、アリシアの真っ白な手が握った。
握手とは本来、互いに武器を携えていない事を証明し合う為、手の内と手の内を合わせるという、例えば一時休戦の意味で敵同士の男達が行う厳かな挨拶である。
極東の島国で、この地で言うところの騎士に該当する武士と呼ばれる生まれであった野良々には、その意味が良く分かっていたので、自分はもちろんアリシアにそれを求めなかった。最も、それ以前に自分は汚れた死者でもあるため、誰も好き好んで触れたがらない事を、充分に承知していると言うのもあったのだが。
もちろん、飛鳥が差し出した手にそんな深い意味はない。ただ単に仲良し子良し、手を取りましょうという、それだけのことである。
そして今、飛鳥は自分の真っ黒な手が、アリシアのきめ細かで真白な手を汚そうとしている事に気付いて、引っ込めようとしたのだが、それが掴まれてしまったという状態である。アリシアがその手を慈しむように撫でながら
「この手は村を守り、村の悪を払い、村を支え、今尚も村を助けている、気高く美しい者の手です。けがれなどどこにもありませんよ？」
そんな事を真顔で言われ、思わず顔を赤くしてしまっている飛鳥に、アリシアは手を解き、百合も恥じらって俯くような微笑みを浮かべた。
「いや、あの、その、あはははは、あはははは」
ゼンマイ式はとりあえず笑った。嬉しいやら恥ずかしいやらくすぐったいやらで
「あ～、あ～、あ～……。あ、でも、その、意外だなぁ私。えっと

何ていうか、何て言いますかですね、その」
　指同士をつんつん突き合わせたり、自分でゼンマイを巻いたり、カチューシャを直したりと、何やら忙しく落ち着きない様子で、何を言ったものか、どうお礼を言おうか、いや、お礼も変か？　変だよな。とか色々迷走したあげく、どうでも良い事を口走ってしまった。
「アリシアちゃんって、お花畑でお花摘んでるようなイメージがあったんだけど、も、も、も、もしかしてキコリさん？　そ、そのですね。すっごくすべすべで綺麗でビックリしちゃったんですけど、でも、その、手にままままま、豆があったものでやんすから」
　アリシアはほんの少しだけその笑顔を陰らせたが、しかしそれも一瞬の事である。
「ふふふ。お花ですか。有難うございます。でも、ええ。そうですね。私は普段から馬の世話で、よく手綱を引いてるものですから」
「あ、あ～あ～！　そうですよね～！　あはははは」
「アリシアちゃん。ほんなら左手も見せてもうてええかな？」
　発したのは野良々だった。
「確かに荒縄を四六時中握ってたら、利き手に豆ぐらいは出来るやろな。馬も結構聞かん坊多いしね……せやけどさ、利き手でない方の手に、もしも利き手以上に豆があったりしたら、それはなんやろかな？」
　彼女は遠まわしに、剣の握りの事を言っているのである。それも的確に、『利き手は鶏卵を握るよう添えるだけ』という、帝国正規軍の両手持ちの型を指摘している。
　利き手で振るい、逆の手で御す。
　帝国正規軍の剣術において、体重を乗せて打ちこむ、渾身の一振りに剣筋を与えるのは、確かに利き手である。しかし、振りに重さと早さを与え、さらに振り切った剣を再び中段や車の構えに直すのは、利き手とは逆の手である。体重のあらかたを乗せた一撃、そのつけを全て逆の手が支払うのだから、当然、その痕は掌に刻まれて

いくのだ。
野良々がアリシアはただの村の娘でないと確信したのは、兄弟川の橋で見かけた時の身のこなし、既にその時点である。
「隠さなくたってええやん？　ウチら村を守りに来た仲間やん？」
アリシアはしかし、野良々の向ける目が非難の眼差しではなかった事に内心驚いたが、しかし。直後にその胸を安堵に撫で下ろし、改めて挨拶をする事にした。
「それでは――」
と。
村がざわついた。
聞き違えでなければ、彼らの誰かが、『コボルト』と言った。
三人がほぼ同時に目を向けると、確かに白く毛深い半人半獣のコボルトが、村の北側で歪な牙を覗かせ、神経を逆なでするような声で「ヒヒヒヒヒヒヒ」と鳴き、村人達を後ずさりさせていた。
オークがブタと揶揄されるように、コボルトはキツネと呼ばれている。
力も体格も、オークには遥かに及ばぬ為、ヒエラルキー的にはオークより下に位置するのだが、しかしそれらがキツネと忌まれるように、コボルトはオークにはない素早さと知恵を備えている。
単体であればコボルトは、ツヴァイヘンダーを扱う手練の上級騎士二人で五分（ゴブ）と言うところである。しかし彼らの脅威は、オーク以上に群れをなす事と、群れの意味を理解している事と、そして何よりも彼らを統べる存在にある。
今森から現れたコボルトは、野良々が察するに偵察役である。しかし偵察役が、身を隠さず堂々と姿を露わにしたと言う事、それが意味するのは、群本体の到着が近いと言う事に違いあるまい。
――急がなくては。
「飛鳥！　みんなを集めや！」
「合点承知！」
地を蹴り、疾風もかくやに丘を駆け降りて行ったのは野良々であ

る。彼女は一陣の風となって足音さえなく村を駆け、瞬く間にコボルトへ飛びかかってすれ違いに数閃。抜刀も納刀も曖昧なうちに肉片に解体し、しかしすぐに飛び退いて森に向け居合の型を取った。次の備えである。飛鳥もアリシアも、それですぐに悟った。既に本体が到着しているのだ。こうなっては穏やかに避難といった、悠長はしていられない。

「速やかに教会に戻れ！！」

裂帛のような声が村に響いた。

「ここにコボルトの軍勢が押してくる！！」

野良々の妙技に見惚れていた村人達も、撃たれたように我に返り、丘にいる見知らぬ娘を振り返った。アリシアである。

「はいはい皆さん従って従って～！！」

アリシアの声に続いて、飛鳥はパンパンパンと手を叩きながら、村中を駆け回って集合をかけた。そして駆け回りながら内心焦っていた。実は昼から、愛鋸デイジーがうんともすんとも言わなくなっていたのである。今朝早くから酷使していたせいと、灰や煤が原因なのだろうが、よりによってこのタイミングである。

吠えなくてもデイジーは強い。正確に振るだけで、グレートクラブやバトルアクスなど及びもつかない威力を秘めている。とは言え、飛鳥は武人ではない。刃物の扱いを碌に知らぬ彼女が、ＸＸから前衛を任されるまでの戦力たり得ているのは、一重にデイジーがチェーン・ソーだからである。

飛鳥はデイジーで相手を仕留める際、決して『斬りつけている』のではない。正鵠を射るならば、彼女はデイジーを『押し付けている』のだ。故に彼女はデイジーの駆動を奪われると、その力の数分の一も発揮出来ないのである。

とは言え飛鳥の膂力、デイジーの重量である。一振りに技巧がなくとも、当たれば唯では済まない。しかしコボルトには恐らく『当たらない』。彼女の出鱈目かつ単調な大振りは、知恵と素早さを備えた半人半獣に、いとも簡単に避けられてしまうことだろう。その

意味でデイジーが動いたところでどうにもならないのだが、しかしせめて、注意を引くぐらいの役には立てるのだ。そして今はそれさえ出来ないとなれば、自分は最早誘導役に回るしかない。故に彼女は焦りつつも、駆けているのだ。

チラリと飛鳥は横目で、村の南側の様子を窺う。アリシアが手際よく誘導している。しかし小高い丘に囲まれたビスケット村から出る道には、一定の幅がある。そしてそれはそれほど広くないし、ましてパニックを起こしている村人が殺到すれば、誘導は誰であっても楽にはいかない。

そしてそれを、そいつらは狙っていたのだろう。

北の森から、地揺れと共に、それらが駆け降りて来た。

夥しい、雪崩の様な白の大群である。

村の北側が、まるで白の染料を流し込まされたかのように、埋め尽くされた。

楽に２００はいる。

アリシアは誘導の手を止めて舌打ちし、急な丘を滑り降り、村人達を避けながら野良々の方へ駆け、そして腰に帯びているブロードソードを――――、否、ない。

彼女は足を止め、必死に探す。手近な武器は？　代わりとなるものはあるか？　青の瞳に写るのは復興用に持ち出された工具ばかり。伐採用の斧、枝狩り用の鉈、加工用のノミ。刃毀れしたナイフ。どれもが軽過ぎる。どれもが武器たりえない。

しかし、空手よりはマシかと、彼女は木材に打ちこまれていた手斧を引き抜き、唯一人でコボルトに対峙し、注意を引いていた野良々の脇に肩を並べた。

「帝国正規軍のアリシア・オーランド！　及ばずながら助太刀する！」

野良々は先ほどとは打って変わった、アリシアの力強い声と面相に、へ～、と横目に小さく笑った。キコリの手斧一振りを、ここまで様に構える手合を、彼女は知らない。

「そっか。やっぱり帝国の偉いさんやったんか。道理で隙がなかったわけや。アリシアちゃん相当な剣士やろ？　ウチには分る。正直な話、もしあの時アリシアちゃんがナマクラ一振りでも差し取ったら、ウチは怖うて抜いてたで？」
「如何にも。我は剣に生きて剣に誓う者。先日のギルドに対するベオウルフの一件、何も申し開きはない。部下の始末は我の不始末。本来であれば死して詫びるべき大罪なれど、今は火急につき、どうか御容赦願いたい」
「っは～固い固い！　いややいややそんなんは！」
野良々は笑った。
「確かにあのときはびっくりしたし腹も立ったけれど、済んだ事は蒸し返さんよ。ウチも旦那も飛鳥もさ。せやけど、まぁ、ん～。どないしてもアリシアちゃんが心苦しい言うんやったら、これが済んだら一杯付きあいよ？　ウチらにな」
アリシアも笑った。しかしその笑みはこれまでの穏やかな娘のようなそれではなく、凛々しい騎士の微笑である。
「我は帝国より任を帯びている故、済まぬが酒は呑めぬ。しかしギルドと協力して酒場の衛生状態を調査をするのは吝かではない。その辺りでどうだろうか？」
「っはっはっは。思っとったより帝国の人間も話分るんやな。見直したわ。ほな一緒に後で酒樽の具合を見にいこか。へへ、死体にも消毒ぐらい必要やろしな」
アリシアは鋭い眼光はコボルトに向けたまま、しかし口元だけは笑みを返した。
自分達を円形に取り囲むようコボルトの大群が動いていく為、二人は必然と背中合わせになる。やはりオークとは違い、群れの意味を理解している。しかしその知恵故、その用心深さ故、コボルトどもは村人は追わず、大群に臆さず対峙する二人ばかりを警戒している。これは狙い通りである。
ジリジリと、着実に、コボルトがその円を狭めてくる。

アリシアはチラっと横目に南側を見た。今は飛鳥が代って誘導してくれている。しかし不慣れな様子でぎこちない。遅くはないが、早くもない。
「キツネが余所見せんうちに、ぼちぼち打ってでるかいアリシアちゃん？」
同じ事を野良々も気にしているようだ。
「それとも、ウチが退路用意するから、そこから一気に丘まで行くかい？」
そしてその上、アリシアの身までを案じている。アリシアは心から彼女は大したものだと思い、そしてギルドに対する認識をもう一度改めようと思った。先日のオーク討伐の件にしてもそうだが、飛鳥にしろ野良々にしろ、まさに騎士よりも騎士然とした心構えに立ち振る舞いである。
アリシアは敬意を込めて、しかし誇りを持って自らの心構えも伝えることにした。
「今の言葉は聞き捨てならんなギルドの戦士。我は６人とは言え部下を預かる身。コボルト風情に背を向けたとあっては騎士の名折れ。如何に得物が手斧とは言えこのアリシア・オーランド、構えたからには討つか討たれるまで降ろす気はない。今の言葉をそのまま返すが、どうだ？」
っはっはっはと野良々は笑った。手斧一つでコボルト２００を討ち取ろうとは、これほど戦を舐めた馬鹿もいない。しかもそれを帝国正規軍の剣士が口にしたのだから、彼女は一周回って感服してしまった。
「いや～参った参った。ほんま参った。アリシアちゃんいいねぇ。すっげー気に入ったわ。せやけどさ、ウチは見ての通りもう死んどるからな。死んだもんをさらに死なすなんて、そんな大それたマネがキツネに出来るとは思わんな……ほな準備はええか？」
「いつでも」
野良々がそれを聞いてカチっと太刀のツバを弾いた時、しかし。

野良々の目が、信じられないものを捉えてしまった。
コボルトのすぐ傍の瓦礫、その陰で子供が震えているのだ。野良々はショックで自分の瞳孔が散大するのを感じ
「……ばか」
と、思わず漏らした。
警戒していたコボルトは、その動揺を見逃さなかった。半人ならではの知恵と半獣ならではの勘で、一頭がそれを悟り、そのキツネのような顔を、注視せよとばかりに突きあげ
「ヒヒヒヒヒヒヒ！」
と鳴いた。瞬く間に群れに伝播し、コボルトどもの視線が揃ってその瓦礫へ向けられ、
「くそったれ！！」
野良々は我も忘れてコボルトの包囲を突破し、矢のように駆け、すぐさま子供を抱き抱え――その背中に、一頭のコボルトが爪を振りおろしたが、その手の甲にズダン！　と手斧が食い込んだ。骨が砕け肉の潰れる鈍い音がし、続いてコボルトの悲鳴。アリシアの一撃である。しかし彼女はそのまま容赦なく、傷口を開く様に斧を捻じりながら引き抜き、そのまま円運動に身体を返して今度はコボルトの脛肉にズダン！　と手斧を叩きこんだ。コボルトがのたうつ音に野良々はそろっと振り返りつつ、そして自分の背中を守るように構える彼女を見上げて
「その子を下がらせろ！！！　早く！！！」
アリシアは吠えたが、しかし野良々が動かない。
野良々は、普段ならこんな無様、寝惚けていようと起こさないだろうにと苦笑しつつも、それを脇腹から抜いた。
黒い血と共に彼女の手に収まったのは、瓦礫から突き出ていた、握り拳ほども大釘である。彼女は湿り気のある息をしながら、横向きにぺっと黒い血を吐いた。
「急ぎなお嬢ちゃん。早く」
と、その子を後ろに手で追いやってから、改めて太刀を握り直し

た。その間にも襲いかかっていたコボルトに対し、アリシアは一歩も後退せず、むしろその否妻の様な気迫で群れを圧していた。彼女は手斧を中段に構えたまま、

「立てるか！？」

と声を掛けると

「ったりめぇよ」

と脇腹を抑え、太刀を杖代わりにして、野良々は何とか立ち上がろうと膝を立てるが、しかしそこから先が動かない。

そしてその間にコボルトは、あろうことか『陣形』を整えている。アリシアに圧されていたわけではないのだ。ただ唐突の野良々の行動が解せなくて、そしてアリシアに予想以上の反撃を受け、狡猾で用心深いコボルトどもは様子を窺っていただけである。そして今は問題なしと判断し、いよいよ仕留める支度を始めたのだ。

野良々は片膝を立てたまま、強がって苦笑した。

「へへ。わり、ちょっとだけ」

突きあげるような衝動が胃からかけ上がって、野良々は思わず口に手を当てると、真っ黒な血反吐がブっと飛び出してきた。その掌で滲む黒い血を茫然と見つつ、しかし野良々は歯を食いしばって覚悟を決めた。

「……まずったわ。こりゃ腑までいっとるな」

アリシアもそのただならぬ様子を背中で感じ取り、その顔に焦りの色が滲んだ。その一方でも目を右に左に動かし、コボルトの動きを把握する。陣形は『Y』の字になっているようだ。前面に兵力を集中させつつも、両脇から挟み撃ちにするつもりらしい。取り囲むのをやめたのは、やはりもう様子見の必要なしと踏んだのだろう。しかしそれにしても、たかが二人に酷く周到な、とアリシアは奇妙を感じた。

「逃げやアリシアちゃん。今のウチでも、注意ぐらいはひける」

ゼーゼーと湿った息をしながら、もはや瓦礫に背中を預けてしまっている野良々は、徐々に後退してくるアリシアの背中にそう言っ

た。しかし彼女は野良々の傍まで下がってくると、手斧を右手に任せ、野良々を左脇に軽々と抱える。
「同胞を見殺しにするほど我は愚かではない。見くびるな」
野良々はその腕力にも驚いたが、しかしそれ以上にそう言ったアリシアの、強がりではなく自信に満ちた表情にこそ驚いた。コボルトは前から分厚く、左右から広く攻めてくる。後ろは空いているが、いくらアリシアに力と早さがあっても、野良々を抱えてコボルトを振りきれるとは思えない。まして得物は手斧だ。
自分の太刀を貸そうとも思ったが、しかし帝国の太刀遣いでは数度の振りで刃毀れを起こすだろうし、最悪は折れてしまう。それならまだ手斧の方がマシだ。
つまりこれでは、どう転んでも勝機はない。なのに何故、どうして、アリシアはこんなにも自信に満ちた笑みを浮かべているのか。
野良々の困惑にも似た表情に、しかしアリシアは今一度頷いて見せて、しかもそして、あろうことか。彼女は唯一の武器であるその手斧さえも場に捨てたのである。
流石にそのあまりの不審に、いくら獣とは言え知恵のあるコボルトは、何かの異様を察知していた。これは、何かあると。
そしてアリシアが、その『解』と思われるものを呟くよう口にした。しかしそれは、コボルトにはもちろん、野良々にさえ意味が分らなかった。
――腐っても、ヤツは我の弟だ。
と、
刹那。
空より鉄の雨が、コボルトの陣に降り注いだ。合わせて素早くアリシアは脱兎の如く後退する。その続けざまである。
「第二射！　放て！」
再び鉄の雨が、快晴の空に弧を描いて降り注いだ。コボルトは一気に散開して後退する。
それは碌に当たりもしない、力も纏まりもない投石染みた、自由

落下のような、数ばかりの矢である。
「第三射！　放て！」
しかしそれでも、猜疑心が強く、疑い深いコボルトの群れを下がらせるには、十分だった。アリシアと野良々を下がらせるには、十分だった。
一体何事かと野良々が顔を向け、その正体を誰何しようとした時、目に飛び込んできたのは飛鳥だった。今の事態なぞお構いなしに、噴水みたいにビービー涙を零して泣きながら、もしかしたらさっきのコボルトより怖いかもしんない感じに飛び込んで、　彼女は野良々をアリシアからひったくるや否や抱き締めて
「わ～～～！！！　野良々ちゃん死なないで死なないで死なないで死なないで！　おにゃ～～～！」
大声で泣き出した。おにゃ～～の意味がわかんない。
「やだやだやだ～～！！！　う～～～！！！　死んじゃいやだ～～～！！　やだやだやだやだやだやだやだやだ～～～！！　おにゃ～～～！　私に黙って死んだら殺す～～！！　殺すから死なないで～～！！」
要所要所意味不明だったが、しかし彼女は本気でボロボロと泣いていた。
「うううう！！！　死体なのに死なないで！　そんな新しい死にかた私認めない！　わ～～～～！」
顔にボロボロボロボロと涙を零されながら、やれやれ泣きたいのはウチやのにと野良々は苦笑しつつ、飛鳥の頬に指を当てて涙を拭った。
「……大丈夫やから飛鳥。大丈夫。ウチは大丈夫。本当に、正味の話したらさ、ウチ今メッチャ痛いけど、死なれへんから。ウチはさ」
と。
そのタイミングである。
「帝国親衛隊イージスが隊長、アテナ殿とお見受け致す！」
村の南の小高い丘の上、やや西に傾いだ陽ざしを受け、そこにズ

ラズラズラと姿を現したのは、教会に駐屯しているはずのベオウルフ小隊だった。その登場に、飛鳥も野良々も村人も、皆が唖然とし、アリシアばかりが笑んでいた。
「我ら！　『元』誇り高き帝国正規軍小隊ベオウルフ！」
その『元』とと言う言葉に、村では小さくざわめきが起きた。
コボルトどもにはもちろん、人の言葉は分らない。しかし今しがた起きた奇襲の正体と思しきものが群れをなして現れて、その首領と目される存在が声を張り上げているとあれば、コボルトはその性格上、耳を欹てざるを得ない。
「我ら領地を失い！　爵位を失い！　名誉を失い！　今は罪人遊軍の身なれど！　未だ命はここにあり！　未だ誇りはここにあり！　汚名ここに雪ぐべく！　我ら一同身命として！　及ばずながら助太刀致す！　皆、ここに騎士の誓いを立てよ！　抜刀！」
弓兵達は腰よりズラズラズラとショートソードを抜き、スモールシールドと共に胸の前にかざし、声高らかに宣言した。
「この剣は民を守る為！！　この盾は民を守る為！！　この心が民の剣となりて！！　この身体が民の盾となりて！！　我ら一同！！
ここに民の為に死なんと欲す！！」
彼らはそして、身を守るべき盾を構えず後ろに背負い、剣を両手に持って八双に構え、決死の覚悟を露わにする。
「全軍！！　命に換えて民を守れ！」
「おおぉぉおお！！！」
怒号の如き掛け声を挙げ、彼らは雪崩の如く村に乗り込んできた。
無謀か蛮勇か狂気の沙汰か、ろくに戦の経験も無い弓兵達が、ただ一振りの剣を頼みとし、ろくな陣形も整えぬままにコボルト共に特攻をかける。
戦力的に見れば圧倒的に、ベオウルフが不利である。個々の戦闘能力、統率力、総数、何一つ取ってコボルトの群れに勝るものがない。
しかしそれでも、コボルトは命を惜しまぬ騎士でも武士でもない、

我が身一番の獣である。
　さらに今しがた受けた弓兵達の予想外の奇襲に、相当意表をつかれたらしく、この何でもない特攻に対して、彼らは必要以上の臆病風に吹かれ、そしてその風はそのままベオウルフにとって追い風となった。
「アテナ様！　ひとまずこれをお返し致します！」
　皆が入り乱れて奮戦する中、アリシアのもとに駆け寄り、跪いて恭しくブロードーソードを捧げ持ったのはベオウルフの小隊長だった。
「帰還を待たずの独断行動、まずはお許し下さい！　我ら全員既に領地爵位を返上し、今はただの通りすがりの遊軍にございます！　どうかそれで御容赦を！　この窮地を抜けた後ならば、縛り首なり斬首なり何なりと受けます故！」
　彼女がそれ手に取ると、彼は自らも腰のショートソードを抜き、八双に構え
「も、元・帝国正規軍ベオウルフ小隊長！　名乗るべき名はなし！　いざ参る！！」
　と、声を震わせながらも、しかし彼もまたコボルトの中へ飛び込んで行った。
　その背中にアリシアは目を閉じて、小さく呟く。
「お前の処分は本日夕暮れに下す。それは今も変わらぬ。故にそれまで生き残れ。これはイージスのアテナ、直々の命令だ。生き残れ、我が弟」
　愛剣を手に再び彼女が開眼した時、アリシアの目は騎士のそれではなく、まして村娘のそれでもなかった。
「帝国親衛隊イージスが隊長アテナである！！　ベオウルフの助太刀有難く頂戴する！！」
　村中からどよめきが起きた。帝国正規軍において最強の誉れ高い帝国親衛隊のイージスのアテナ。そんなものが村にいたとは知らなかった。そしてそれは誰だろうかと、屈強な男を村から見出そうと

していたら、うら若き乙女が名乗りをあげたからである。アリシアはそんな中で愛剣の鞘を払い、猛然とした勢いでベオウルフに加勢した。

窮鼠猫を噛むとはこの事だろう。

決死の覚悟を決めたベオウルフの騎士が振り下ろす剣は鋭く渾身、全身全霊で、コボルトどもの足や腹を切り裂いた。

しかし所詮はショートソード。軽く短く、得物の威力不足は否めない。しかしその取り回しの良さがあるからこそ、彼らはその猛る心を猛るままに任せ、剣を振るう事が出来たのである。威力の高いロングソードやブロードソードも、技量がなければただの重りや枷であり、振るうのではなく振り回され、悪戯に体力を消耗するばかりである。

例外はもちろん、アテナと名乗りをあげたアリシアで、彼女ばかりは大の男さえ満足に扱えぬその幅広の剣を、安々と振るいながら一頭、一頭、着実に斬り伏せて行った。

「言葉を解す獣がいるなら同胞に伝えよ！　我は誇り高き帝国親衛隊イージスのアテナ！　腕に覚えのあるものから前に出よ！」

剣筋は素早く合理、全てが途切れることなく連続。流麗にして的確。尽くに真髄。降ろす刃も返す刃も流れる用で、見るものを虜にする鮮血の舞い。死の舞踏。

血風を巻き上げ、凛とした面持ちで駆け抜ける、戦場の女神の姿がそこにあった。

アテナの一騎当千ぶりにコボルトはいよいよ浮足立ち、ベオウルフはいよいよ勢いづく。

そんなこんなで一気呵成、一網打尽の一瀉千里、とまではいかないが、しかし着実に次々と、コボルトどもが森へ敗走していく様に、村民達は歓喜の声を挙げた。

決死の覚悟と獅子奮迅。

もしもそれがコボルトにもあったなら、結果は真逆になっていたかもしれない。

しかし決死の覚悟も獅子奮迅も、言うほど易く、得られるものではない。まして地位も名誉も誇りも、意地も意気地も矜持も持たぬコボルトには、どうしたって得ようも無いものだった。

「全軍！！　勝鬨！！」

故にこの勝利は、やはりベオウルフ達のものである。彼らは剣を天高く突き上げ

「えい！　えい！　おー！！」

と勇ましく声をあげた。勝鬨がビスケット村にこだまし、村人達の歓声がそれを包む。

一度は村を焼き打ちにして名誉を失った騎士たちが、誇りをかけてそれを雪いだ瞬間である。そしてこれが名実共の、ベオウルフ初陣にして初勝利だった。

が。

――――しかし。

森の奥から地響と奇声が響いてきた。

勝鬨が止み、歓声も止む。

「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ」

と、神経を逆なでする声で鳴きながら現れたのは、コボルトの首領、キングコボルトである。

頭頂部に見事な鬣を生やし、体躯は並のコボルトと小柄なオークの中間程度――およそ３ｍ。しかし握力はオークの頭を潰し、掛ける足は駿馬よりも早い。その単体能力もさることながら、何よりも怖ろしいのは、その存在が群れに与える絶対の自信である。

――キングコボルトがそこにいるならば

コボルトはもう臆さない。

コボルトはもう脅えない。

コボルトはもう疑わない。

コボルトはもう迷わない。

コボルトはもう惑わない。

コボルトはもう、人に敗れない。

敗走したコボルトまでが、再び森からゾロゾロゾロと、ゾロゾロゾロと展開し、さらには本体を含め、村の北側半分を埋め尽くすばかりに犇めいた。
白色、一色。
４００からはいる。
数は先の倍で、士気は数倍。総数はベオルフの十倍。
そこにはただ一言、絶望しかなかった。
「アテナ様」
アリシアの傍らに片膝をついたのは、ベオウルフの小隊長だった。
「私の、不手際です。これだけ御尽力を頂きながら、村人たちの半数はまだ教会にすら避難しておりません。丘付近にも数多くが残っています。ですが」
彼は兜を脱いで、アリシアの目を真っ直ぐに見た。
「ここで我らが喰いとめれば、まだ少しは時間が稼げます」
教会で彼女に打たれたその顔は、まだ痛々しく紫色に腫れ上がり、しかしその目には、教会で彼女が見た、情けなく命を乞うていた負け犬の脅えはない。今その瞳には、確かに騎士の鉄が宿っていた。
そして彼は、自らの姉に告げる。
「どうか、御覚悟下さい！」
言わんとしている事は単純明快だった。彼は、アリシアに自分達と共に、コボルトの囮になってくれと言っているのだ。一人でも多くの村人を逃す為に、少しでも遠くへ逃す、その時間を稼ぐために。
この期に及び、ベオウルフの中には誰一人として、その場から背を向けるものはいなかった。
確かに、足が震えている者がいる。
確かに、剣の握りが頼りない者がいる。
確かに、肩で息をしている者がいる。
誰もかれもが、例外なく、銘々に怖がっている。
しかし怖がりながらも、誰もかれもが、逃げようとはしなかった。
一人がショートソードを高く掲げる。

「汚名を雪ぎし我ら一同！！　今改めて！！　ここに誇りの為に死なんと欲す！！　ここに誉れの為に死なんと欲す！！」
「おおぉぉぉぉおお！！」
彼らは合わせて、その剣を天高く突き上げた。
これが本当に、あの村に火矢を放ったベオウルフと同じ部隊なのだろうか。と、野良々にはそれが信じられなかった。
飛鳥の腕に抱かれながら、薄れる意識の中、そんな不思議を覚えていた。人はこんなにも変われるのだろうか。人はこんなにも変えられるのだろうか。と。
アリシアの返事を待たす、ベオウルフの小隊長は誰よりも前に出る。そして号令。
「陣形！　鶴翼！」
彼らは再びショートソードを八双に構え、広く間隔を開けてV字型に隊伍を組み、防御に特化した陣形を布いた。
彼らはもう勝てぬと分っている。生き残れぬと知っている。だから少しでも、少しでも時間を稼ごうと、一分一秒でも生き延びようと、この陣を布いたのである。
少しでも村人を遠くへ逃す為、その為の時間を少しでも稼ぐため、彼らは。
キングコボルトどもに、『くびり殺される』事を選んだのである。
しかしそんなことなど理解せぬ、新たにキングコボルトという大いなる戦力を得たコボルトどもは、
「ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」
と、また耳障りな声をあげた。まるでベオウルフを嘲笑うかのような、これから嬲り殺しにする愉悦を堪え切れない様な、そんな不快で下卑た声を、それらはあげた。
そしてそれが終わりの始まりだった。
「……哂ったか？　騎士の覚悟を」
アリシアが、ゆらりと、それに向いた。
これまで誰もが聞いたことのない、喉元に切っ先を突き付けるか

のような声で、彼女はそう言った。
「久方ぶりに、逆鱗に触れてくれたな」
彼女はそのブロードーソードを、両手に握り、そして天高く突き上げた。
そこより先は、一重に奇跡であった。
彼女の掲げる切っ先に誘われるが如く、雷鳴を轟かす暗雲が、晴れ渡っていたビスケットの空を、煙のように覆い隠し、たちまちのうちに大雨が降り注いだ。
天が割れたかのように叩きつける豪雨と、青白い稲光が空を掛け巡り、そんな中で、彼女は今まで見せた事のない、険しく厳しい、アテナよりもアレスに近しい血相になった。
「分も引き際を弁えぬ者に、我は加減を知らんぞ。獣ども」
刹那、天をも砕く亀裂の如き稲光が、彼女の掲げる剣に駆け下りて、接触と同時に閃光と雷鳴。
ビスケット村全体を揺るがす衝撃と突風が辺り一帯に伝播して、そこかしこで悲鳴があがった。村人のあげたこれは、しかしアリシアを慮っての声である。
あの神の怒りの様な雷の直撃を受ければ、例え１０００年の大樹であっても、幹の根元まで黒焦げに裂かれたであろう。
まして打たれたのはただ一人の人間、骨の芯まで灰になっていようと不思議はなかった。
しかし、野良々を風から守ろうと覆いかぶさっていた飛鳥が、どよめきに誘われてそっと顔をあげると、そこに奇跡が広がっていた。
「全軍！！　我を切っ先とする楔の陣形を取れ！！」
アリシアの――アテナの号令に、ベオウルフは素早く鶴翼の陣を崩し、彼女を先頭として△の形に陣を布いた。
今や村娘などと呼べぬその凛々しき美丈夫は、自らの足でしかと大地を踏みしめ、柄を両の手に握って腰を低く落とし、剣を車に構えていたのである。
その色白の顔にも、ブロンドの髪にも、意思の強い碧眼にも、傷

一つ煤一つ見当たらない。
しかしなにより驚嘆すべきは、その刃で、それは先の雷を帯びて火花をたぎらせ、さらに神々しいまでに輝く蒼き切っ先は、悠に槍の長さを超えていた。
さながら、守護神パラス・アテナの携える槍である。
アテナは冷徹な眼差しをキングコボルトに向け、宣告する。
「これにて戦局を終了させる。獣ども。せめて守護神（アテナ）の慈悲を賜りて、悔悟の間も無く散華せよ」
キングコボルトも咆哮をあげ、アテナを穿つが如く指さして、同時に一斉、コボルトどもが呻りをあげて襲いかかって来た。
野良々はそのとき、アテナの二つ名とも言われる『雷光の槍』の意味をを理解した。
———あの長さは、確かに剣にゃ見えへんわな。
得心と同時に、事は決した。
ものの、一薙ぎ。
視界そのものを真横に分断する、蒼き稲妻。
青く、白く、焼かれ裂かれるコボルトの群れ。蒸発するキングコボルト。
尚勢い余り、中空を駆けまわる青炎の大嵐。
対峙する全てが青白い焦土と化し、コボルトどもは灰塵に帰した。
一薙ぎで天を切り裂くとまで言われた『雷光の槍』。
ひとたび戦場で剣を振るえば、たった一人で戦局を一変させるほどの戦果。
噂に違わぬ戦神の一振りがそこにあった。

結局、村人たちはビスケット村を離れる事になった。
ここまで執拗に、短期間に魔物が現れるには何か理由があるのだろうと、帝国が決定を下したのである。
良質な火薬の原料となる土や、家屋の建造に適した材木が獲れる北の森も、工業油の元になる、ラージトードーが跳ねている兄弟川

も、全てが惜しかったが、それでも命に換えられるものではない。
教会で男達の帰りを待っていた女子供に、彼らが事の成り行きと事情を話した時、しかし彼女達はまず夫や恋人が無事であった事に涙を流し、そして道中を警護していたベオウルフに頭を下げて感謝した。
彼らの新たな移住先については、既に帝国親衛隊イージスの隊長が直々に一筆をしたためて帝国に送った為、さほど時を待たずに決まる事だろう。
しばしの間、ビスケット村に暮らす村民達はこの教会を仮住まいとする事になるが、引き続き護衛はベオウルフ小隊である。不満の声はあがらなかった。
村から引き揚げるときに、別れの挨拶として、釣鐘塔の鐘を鳴らしたのは不立文字飛鳥だった。持ち前の膂力で以て、その『どっせい！』と付いた鐘の音は、教会の中で手当てを受けていた村人や騎士たち、そして野良々の耳にも届いたと言う。

「は～～～。やっぱり人は見かけによらないですね～～。アリシアちゃんがあのイージスの隊長だなんて」
待合酒場グウィンドリンにて、皆の視線とヒソヒソ話を全身に浴びつつも、木のコップを両手に持ち、暖められたミルク酒をチビチビとやっているアリシアは、肩を落として溜息を吐いた。
「どこに赴いてもそのように言われます。私としては不本意なのですが」
向かいに座る飛鳥も飛鳥で、教会に預けている愛鋸デイジーと、傷の手当てを受けている野良々の事がずっと気になっていて、さっきから机の上で指をトントンとせていた。彼女二人は共に野良々の傍にいると言ったのだが、野良々当人はそれを最後まで良しとせず、彼女は『アリシアちゃんは、ウチと約束した通り一杯付き合ってや』
『飛鳥は、ウチの代りにアリシアちゃんと一杯やってきて』という何とも妙な事を、腹に包帯を巻かれながら言っていたのである。ち

なみに傷は放っておけば治るらしい――すげぇ@飛鳥。
　しかしそんな事でそう簡単に了承する二人でもなかったのだが、しかし。この時間になって、ようやくギルド『レッドハット』のマスターであるＸＸが、遠方の用事を済ませてこの待合酒場に帰ってくる。そんな報せがあったと教会の神父より聞かされ、飛鳥は『今日の出来事全部全部ブチマケテやるです！』と息を巻き、しかしそれでも不承不承という具合に野良々を置いて、こうしてゼンマイ式はリンゴをシャクシャクやっているわけである――私もちょっと捲いてみたいな@アリシア内心。
　ともあれ、本題に戻る。
　飛鳥はゴクンとリングのヘタさえも飲み込んで証拠隠滅し、アリシアの耳に口を寄せ、
「それで、ここに来た本当の目的って？」
　と尋ねた。
　酒のせいではない。
　確かにアリシアは今、頬を別の理由で染めている。
「そ、それはぁ、その。はー、まぁ」
　パラス・アテナが、なにやら挙動不審である。視線が右往左往。マバタキの回数増加。さらに今まで半時もかけてチビチビ飲んでいたミルク酒を、一気にグイと開けた。ゴトンと置かれたコップの底が見えた事に、飛鳥は目を丸くして
「あ～、大丈夫アリシアちゃん？」
　尋ねてはみたが、しかしそんなものは一目瞭然である。アリシアは頬を一層に染め、大きな目を半分閉じて潤ませ、妙に色気のある表情になっていた。しかしそれでも彼女は
「ええ、このぐらいは。いつも戦のあとで部下に付き合ってますから。ヒック」
　あ～～～嘘っぽい@ゼンマイ式。
　飛鳥は苦笑しつつ、顎肘をついて
「アリシアちゃんって、幾つ？」

予想外の質問だったのか、アリシアは一瞬きょとんとして、それから指を折って
「今年で１７を数えます」
今更何にも驚かないぜ@飛鳥。
「ねぇアリリン」
「ア、アリリン？」
「そ、アリリン。それで、アリリンは何をしにここに来ちゃったんです？」
冷静に考えれば、飛鳥がさっきからとっているこうした行動は命知らずにも程がある。アリシアは１７の乙女とは言え、帝国親衛隊イージスの隊長アテナである。もしも今酒が入っておらず、場所も部下達の前であったなら、対面的に即座に斬り捨てられても不思議はない。だから酒場はの空気は最初から、実はずっと凍てつきっぱなしなのであるが、しかし飛鳥はそんなことに全く思い至らす、自分の分のミルク酒に口をつけつつ、アリシアの答えを待った。
確かに帝国親衛隊の隊長が、たかたが一小隊の処分や村の視察ごときに赴くなどはあり得ないと、飛鳥でもそんな事ぐらい理解できる。ならばそれに値する、秘められた本当の理由とは何なのだろうかと、アリリンの顔が赤くなった理由とは何だろうかと。彼女はミルク酒でゴクゴクと喉を鳴らしながら気にしている訳である。
「許嫁を追って参りました」
ゼンマイ式が盛大に噴いた。アリシア神回避。
「大丈夫ですか！？」
っげほ！　っげほ！　とむせているゼンマイ式の背中を擦る守護神アテナの顔は、本気で心配そうである。さっき飛び出たネジとか歯車とかバネとか、アレ良いのか？　あれ大丈夫なのか？　結構重要なパーツとかも出てたけどとか、ちょっとアリシアさんの気が気でない。
ともあれ二人居住まいを正し、さて。再開である。ちなみにさっきのパーツは全部飲んだ――本当に良いのかその対応@アリリン。

アリシアは今、アテナの面影も騎士の面影も微塵もなく、ただ純粋な乙女と化して顔赤く俯いていて、でもやっぱり力は強いから、テーブルで円を描いている人差し指は、許嫁の事を語るに連れて、もうどんどん削って行く削って行く。

飛鳥もまた顔を赤くしつつ、腕を組んで考え込むように目を閉じていた。

「ん～……なるほどね～。その人は帝国親衛隊イージスの元隊長ですっごく強かったんだけど、ヒック。でも全然騎士っぽくなくて性格がチャランポランで。そんでアリシアちゃんをいつも小馬鹿にしてて、ヒック。ただ時々格好良くて、ヒック。頼もしくてステキでときめいてたりして」

実を言うとさっきの酒が飛鳥にきいている。アリシア、どんどん顔赤くなる。

「それで、ヒック。今でも忘れられなくて追いかけてると。ＯＫアリリン？」

「は、はい」

アリシア、削って行く削って行く。店の親父、青くなる青くなる。

ゼンマイ式がフラフラし始めた。

「そんで～～～。ん～～～～。通り名が『赤色の鬼札』か。ん～～～、にゃるほどなぁ。ヒック」

まぁどこの世界にも、鈍感な人物と言うのは必要不可欠である。ゼンマイ式は腕を組んで呻る傍ら、顔の赤いアリシアはテーブルに二つ目のクレーターを作成開始。彼女もだいぶ酒がまわり、話も佳境である。

「それでその、ヒック。わ、私は自分の寝室で、シーツを抱いてドキドキと初夜を待ってたんですが。ヒック。その方はドアじゃなくて窓からヒョッコリと顔を出して、こんなこと言って、消えてしまったんです」

「ん～ほいほい？」

アリシアはその顔を、まるで悪戯でもしに来た子供の様な表情に

かえて
「『わりぃわりぃアリシア。ちょっと俺野暮用が出来たんだわ。つうわけでイージス抜けるから後はオメェ宜しく。そんじゃな』って言ったんです」
声マネ終了。飛鳥それに笑わずテーブル叩いてガチ切れして
「わ〜！！　さいってーー！！　ヒック。　まるでそれうちの御主人様みたいじゃないですか〜〜！！」
「あはははは。ビスケット村を救った英雄と一緒にしないで下さい、あんなバカを」
もうアリリンもぶっ倒れる寸前だった。実はお酒などほとんど飲めないのである。しかしそれは飛鳥も同様で、もう今にも閉じそうな目を強引に開けて
「ヒック。お〜〜、言うねぇアリリンちゃんも〜。元隊長をバカっていいますか〜？　愛する人をバカっていいますか〜？」
「ええ、騎士だって言う時は言いますよ。ふふふ」
奇跡的なすれ違いの中、二人はそうして笑いあった。酒場の空気をとことん氷点下にしつつ、笑いあった。しかしここまで来ると、最早お約束の展開である。
宴も酣という頃合い。店の扉がカランカランと音を立てて開いて、
「わりぃわりぃちょっくら仕事が長引いたもんで遅くなっちまったわ。いやぁしかし裏口にいねぇもんだからノラコが怪我したって本当だったんだな。ちょっと先に様子」
とヒョッコリと入って来たギルド『レッドハットと愉快な仲間達』のマスターＸＸ@死亡フラグ全開は、テーブルに座って背中を向けているギルメン２にその場でそんな声をかけ、次に彼女の正面に座って即ち自分と向かい合っている、碧眼色白ブロンドのうら若き乙女と目が合うと
「すいません間違えました」
「どこへ行くつもりだ着様？」
立ち去ろうとしたＸＸの肩に乗せられたのは、本日ビスケット村

にてコボルトのべ４００を一瞬にして灰に換えた、神器『雷光の槍』の青白い刃である。
　ＸＸはこれが悪夢でなければ果たして悪夢とは何だろうかとギルドマスターじゃなくてフィロソフィストになりかけていた。おいマジか、何だこれは。何であそこに置いてきたアレがココにいるんだ。おいどういう事だ。ちゃんと説明しろ。あるいはシナリオ書き直せ。いますぐ改稿しろ。見切り発車でファンタジー始めやがって。どうせお前いつものノリでこんな設定用意したんだろう。適当に自虐やってりゃ笑い取れるとか安易なこと考えて走っただろ。冗談じゃねぇぞそんなもの、こちとら命がけで――とかＸＸがバグっていたら
「何か、申し開きはあるか？」
　酒場が完璧に凍ついた。飛鳥は酔いつぶれていた。
「帝国親衛隊イージス元隊長？　称号オリハルコン？　赤色の鬼札（クリムゾン・ジョーカー）？　我が何と呼べば返事をするのだ貴様は？　答えよ」
　その切っ先が徐々に、肩から首へ動かされていく。ＸＸは振り返らぬまま、静かに「へ」っと笑い
「……すごかったらしいな、今日の活躍よ？」
　ニヤっとアリシアは笑い、次の瞬間ＸＸは入口扉ごと外に吹き飛んだ。凍えるどころかもはや石になっている店の親父に、彼女はチラリと一瞥だけし
「しばし表で迷惑をかけるぞ。手当は追って払う。それと酒の質は問題ない。後で報告しておく」
　冷たくそう残してから店を出た。
　ＸＸは草っぱらの中で大の字になりつつ、頭の中がグルングルン回っていた。色々な衝撃がいっぺんに混じり過ぎている。しかしあの一撃。たった一発のくせ、殴られた頬は口の中がもう裂けているし、足にまで来ているし、目眩も止まらない。全く冗談ではない。
　――発育も宜しいこったよ。
「二度は言わぬぞ。立て」
　冷たい声がして、見上げると、寒色の月を背にしたアリシアが、

それ以上に冷たい眼差しで見下ろしていた。ＸＸは溜息を吐いてから観念したように頷き、
「ああ、そうかい」
よろっと立ち上がると再びその拳が顔に――ヒラっと交わされ、その腕を掴まれる。アリシアは抵抗したが、しかしＸＸから振りほどく事が出来なかった。力負けはしていない。むしろこれまで一度も負けた事がない。幼少に始まり彼が自分の元を離れるまで、力比べで負けた事はなかった。しかしそれでも、振りほどく事が出来ない。
「……くそ！」
ただ、力が入らなかったのだ。視界が滲み、呼吸が乱れ、嗚咽が漏れて。
これまで世界各地、ありとあらゆるところ、様々な理由をつけて、彼女は単身赴き、許嫁の消息を追っていた。
ギルドに身をやつしたと風の噂に聞いてからは、手当たり次第に、虱潰しに、本当に草の根を分けるようにして数えきれないギルドを当たってきた。そして当たりをつけていた人物が戦死したと聞かされた数も十や二十ではないし、その度に心が折れそうになって、けれども。そう簡単に『オリハルコン』が砕かれるわけがないと自らに言い聞かせ、何度も立ち上がって来たのである。
だからだった。
今それが、今それが。夢にまで探して、追い続けていたそれが。何の前触れもなく目の前にいて、笑っているのだ。
幻覚ではない、確かに自分の腕を、あの時よりもほんの少しだけ大きな手で、確かに掴んでいるのだ。
「随分とまぁ、綺麗になったじゃないのアリシアちゃん？　ぶ！！」
ＸＸは蹲った。
膝を鳩尾に入れられたのだ。
アリシアは離れて手早く涙を噴き、そしてその時がくれば必ずと、ずっと渡そうと身に付けていたそれを取り出して、情けなく四つん

這いになっているＸＸに放り投げた。ＸＸは両手をついて立ち上がろうとしていた矢先、目の前にカランと落ちてきたそれに『何ぞ？』と一度目をすがめ、しかし何かを認めると目を疑った。
「私の、ギルドカードだ。持っておけ」
見間違えではなかった。
「ギルドって……。でもオメェ、帝国親衛隊の隊長やって」
「遊軍という形でなら、依頼受諾の許可を帝国から得ている。必要な時はそれでよべ。そして出来るだけ必要としろ、私を。では、これで」
アリシアはそれだけ残して、その場を足早に立ち去ろうした。自分は許嫁である以前に騎士である。騎士が無様な泣き顔を見られるのは、例え許嫁が相手であっても許されない。例え親の死に目であっても、騎士は涙を忍ばねばならないのだ。
足が動かない。
互いに戦を生業とする身。今ここで離れたら、もう一度会える保証などない。ようやく辿り着いた今回の奇跡を、もう終わりにしても良いのか。それで満足なのか。けれども顔を見たら、どうしても涙が止まらなくなる。だから、やはり今は面と向かえない。けれども、離れたくはない。一体どうすれば良いのか、自分に分らない。また嗚咽が漏れてきて、顔を両手で覆い隠し
「おいアリシア！！」
振り返ると、ＸＸから何かが投げられ――ハシっと受け取ると、それはギルドカードだった。
「オメェも、用があったら声掛けな。ゼンマイ式メイドと女の子死体連れて、迷惑かけてやっからさ」
『レッドハットと愉快な仲間達』と書かれていた。
「いつでも最優先に飛んで行くぜ？　いつでもどこでもオメェのお呼び出しだったらさ。……アリシア」
涙に滲んだその奥で、無様に鳩尾を抑えている許嫁が、にやっと笑っていた。

――――――もう我慢の限界だ。
「ギルド風情が騎士にものを投げるとは良い度胸だ！」
アリシアは騎士の誇りにかけ、ＸＸに飛びこんで行った。

『雷光の槍』　了

ギルカ一覧（遊軍）

登録名：アリシア・オーランド
通り名：『雷光の槍』
膂力評価：Ａ
技量評価：Ａ
素早評価：Ｂ
知力評価：Ｂ
総合評価ランク：Ｓ
称号：帝国親衛隊イージス隊長アテナ
コメント：彼が去った後にキャベツ畑で葉の裏を見てみた。どうやらコウの鳥はまだ来ていなかったらしい。
特記事項：神器『雷光の槍』：
最高神ゼウスの怒りに例えられる、アリシアのみに赦された奇跡。
荒れ狂う蒼き否妻は対峙する一切を焼き尽くす。

第二話：雷光の槍（後書き）

どうも無一文です＾＾

最終推敲の関係で、しばらくマイナーチェンジを繰り返しますが御容赦下さい＾＾

さて新ヒロインというべきでしょうか、アリシア・オーランド。本作のチートキャラですね。
聖処女ジャンヌダルクっぽいキャラを書きたいという一心で今話は出来あがりました。
あとは『負け犬再出発』がテーマですね。ベオウルフ。何でも挽回のチャンスがあるもんです
戦記もの自体初なのでしばらく迷走するかもしれませんが、
一話完結型なので、一話いまいちでも次話にかけて見て下さい。マシになってるかもしれません。
地の文章はエセ時代小説っぽくしてますが、ギャグパートは従来のラブコメ風にしているので
どうにも不安定感否めませんでしたが、いっそもう本作の味にしようと決めて今に至りました。

それではまた、三話でお会いしましょう＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2147ba/

レッドハットダブルエックス

2012年1月9日01時51分発行